1．＜聖所＞とは何か

最初にこのレポートで＜聖所＞と呼ぶ場所がどのようなところなのか。簡単にまとめてみたい。

(1)　場としての＜聖所＞

ペルシア語では様々な呼ばれ方をしている信仰の対象となる「場」であるが、地域住民、あるいは地域住民を越えて信者が「聖なる場(jāye moqaddas)」という共通認識を持ち、信仰に基づく行為を実施するあるいは実施されていた場とここでは定義をする。

一口に＜聖所(jāye moqaddas)＞と言っても様々な形でそれは存在する。壮麗な廟を持ち、多くの巡礼者を集める聖所もあれば、訪れる人もいなくなり廃墟となってしまった聖所もある。また、樹木や岩をはじめとする自然物が崇敬の対象となっていることもある。それらが村や町の中にあることも、人里離れた場所にぽつんと見られることもある。そしてこれらは実に様々な名で呼ばれている。

聖所を示す名称は多数あるが、主なものとして次のようなものが挙げられる[1]。

エマームザーデ (Emāmzāde)[2]
ズィヤーラトガー (Ziyāratgāh)[3]
ガダムガー (Qadamgāh)[4]
サッカーハーネ (Saqqā-khāne)[5]
ボグエ (Boq‘e)[6]
アースターネ(Āstāne)[7]

---

[1] 聖所の命名については、Abiyāne, ‘Alī Akbar Nārī, Vajhe Tasmiīyeye Nām va Shohrate Emāmzādegān : bā negāhī be manābe‘e tārīkhī va Joghrāfiyāī, *Mīrāthe Jāvīdān*, 52, 1383S.H./2005, pp.133-158.で詳しく分析が行われている。

[2] 言葉通りにはエマームの子孫を表すが、もう一つの意味としてエマームの子孫を葬ったとされる場所そのものを表す。(*Dāyerat ol-Ma‘ārefe Tashaiyo‘*, vol.2, p.392.) このレポートにおいて発音表記については、基本的に現代ペルシア語の発音に従う。

[3] ズィヤーラトは「巡礼」「訪問」を表すアラビア語ズィヤーラのペルシア語形。ガーは「場所」を表すペルシア語。聖廟を含む聖所全体を示すことが多いが、時にその中の特に崇敬の対象となる一部分だけを指すこともある。

[4] ガダムは「足跡」を表すアラビア語の現代ペルシア語風の発音。

[5] 水運び人の家の意味。

[6] 「廟」「聖廟」を表すアラビア語から。複数形 Boqā‘ は近年のイランで、エマームザーデをはじめとする、信者が崇敬対象とする人物が葬られているとされる「墓廟」の総称として用いられることが多い。本来は、宗教に関連する人物、学者、王をはじめとする統治者などの墓すべてを指す。(*Dāyerat ol-Maārefe Tashaiyo‘*, vol. 3 , p.3.)

[7] 本来は「敷居」「入り口」を指すペルシア語。そこから転じて「聖域」も表す。現在、聖廟に対する敬称のように使われることも多い。

多くの場合、聖所には敬意を払われるべき人物が埋葬されているとされている。どのような人物が葬られているかを示す名称も多数あるが、主なものは次のようなものである。多くの場合、これらは名前の前に置かれる。

エマームザーデ(Emāzāde)
セイエド (Seyyed)[8]、セイエデ（Seyyede）[9]
シャーザーデ（Shāhzāde)[10]
シャー（Shāh)[11]
ソルターン (Solṭān)
ミール（Mīr）[12]
シェイフ (Sheikh)[13]
ハージェ (Khāje)[14]
ピール（Pīr)[15]
ビービー（Bībī)[16]
アーガー（Āqā)[17]
ハートゥーン (Khātūn)[18]

個人が特定されず、様々な属性などで呼ばれる聖所も見られる。

a. 人数　Do tan, Do Ṭeflān, Do Barādar, Haft tan va Hasht tan, Chehel Dokhtarān
b. 職業　Qāḍī, Qaṣṣāb
c. 性質　Javān-mard, Maʿṣūm, Ghāʿeb, Maḥrūm va Maẓlūm
d. 服装　Sabz Pūsh, Siyāh Pūsh

これらの名称が単独で、あるいは二つ以上が組み合わされたり、埋葬されているとさ

---

[8] アラビア語の Sayyid。預言者ムハンマドの子孫。
[9] Seyyed の女性形。
[10] 「王子」を意味するペルシア語。王子という名称を取ってはいるが、実際にはエマームあるいはエマームザーデと関連づけられている人物がほとんどである。
[11] 「王」を意味するペルシア語。これも、エマームあるいはエマームザーデに関連づけられている人物であることが多い。
[12] アミール（amīr）の短縮形。王子、軍司令官などを指す。
[13] 長老、学者に対する敬称の一種。また神秘主義指導者に対する敬称。
[14] 敬称の一種。シェイフ、ピール、アーガーとほぼ同じ意味。また、ある特別な人物に仕えていた人に対しても使う。
[15] 老人を表すペルシア語。アラビア語のシャイフと同じ意味で使われることもあり、神秘主義道における指導者や、様々な情況において人々を導くという役割を持つ老人も意味する。
[16] 良き女性、偉大なる女性を表すペルシア語。女性に対する敬称の一つ。
[17] 男性に対する敬称の一つ。主人を表すトルコ語から。Āghā と表記されることもある。通常名前の前に置かれるが、名前のあとに置かれることもある。
[18] ビービーと同じく女性に対する敬称の一つ。名前のあとに置かれることが多い。

れる人物の名前と組み合わされたりなどして＜聖所＞の名称ができあがる。しかし、ワクフ慈善庁や文化財保護庁のリストやその他文献に現れる正式な名称と、現地で人々が呼ぶ名称が異なっていることもある。これには埋葬されている人物に対する敬称や愛称が通称となっている場合[19]と、異なる二つの呼び名を持つ場合とがある[20]。

また、村に一つしか聖所がなく、他の聖所と識別するための名前が必要ない場合、時には単に「エマームザーデ」「ズィヤーラトガー」とだけ呼ばれることもある。誰がそこに葬られているのかということよりもそこが＜聖所＞であるということが、地域住民にとって重要であるということであろう。実際、農村部では、「エマームザーデ・～～はどこにあるの？」と名前で尋ねても理解されず、「ズィヤーラトガーはどこ？」と聞き直してようやく場所を教えてもらえるということもある。

複数の聖所が村の中にある場合でも、それぞれ固有の名前ではなく、「エマームザーデ・バーラー（上のエマームザーデ）」「エマームザーデ・パーイーン（下のエマームザーデ）」と呼ばれることが多く見られる。「エマームザーデはどこ？」と聞くと、「どっちの？バーラー？パーイーン？」と聞き返されることがよくある。

＜聖所＞の多くには地域住民の崇敬の対象となる人物が葬られていると考えられており、そこを訪れ（ズィヤーラト）、それによって埋葬されている人物からバラキャト(barakat)[21]を得ることができる、あるいはその人物を通してより高位の存在へと自分の願いを届けることができるとされている。

埋葬されている人物の多くはイランの 12 イマーム・シーア派地域の場合、多くの場合、エマームの子孫とされるエマームザーデである。また、エマームザーデの妻や母、従者など本人はエマームザーデではないがエマームザーデと関係を持つ人物である場合や、シェイフ、ガーズィーなどエマームと直接の関係を持たない人物の場合もある[22]。いずれにせよ、バラキャトを持つ、敬意を払われるべき人物が埋葬されていると考えられ、その人物が持っていたバラキャトを得るために人々がズィヤーラトを行う場所がまず＜聖所＞の一つと考えられる。

また、バラキャト持つ人物と直接の関連はないが、崇敬の対象となり、また願い事を

---

[19] 例えば、キャラジ区にある Emāmzāde Ebrāhīm は通常 Emāmzāde Sepahsālār（軍司令官の意味）と呼ばれている。これはこのエマームザーデのある村の名前、Tekiye Sepahsālār から取られているとのことである。

[20] 例えばヴァラーミーン区にある Emāmzāde ‘Oun は Emāmzāde Shaṣt とも呼ばれており、近隣の村の人たちはどちらの名前もこのエマームザーデのものとして認識している。またこれはガズヴィーン州での例であるが、ブーイーン・ザフラー区エブラーヒーム村にあるエマームザーデはワクフ慈善庁のリストに寄れば Emāmzāde Esḥāq という名になっているが、村の人たちには Emāmzāde Ja‘far と呼ばれており、廟に掲げられているタイルに書かれた名も Emāmzāde Ja‘far であった。

[21] アラビア語のバラカ。特別な恩恵をもたらす力であり、霊力、祝福などとも言うことができる。生前にバラキャトを持っていた人物は死後もこの力を持ち続け、信徒に恩恵をもたらすと考えている。

[22] エマームザーデの傍らに、あるいは同じ廟内の別室にエマームザーデの妻あるいは母という人物の墓が置かれている場合がある。多くの場合、女性たちがその墓に触れ、願い事を行っている様子が見られる。

叶える力を持つと考えられている場所に、ガダムガーやサッカーハーネがある。

ガダムガーはエマームなどがそこに足を置いた場所とされる。足跡の主はエマーム、アボルファズル[23]、ヘズル[24]が多い。エマームザーデをはじめとするバラキャトを持つ人物が埋葬されていると考えられている墓廟と同様に、人々の崇敬の対象となっている。ニーシャーブール近郊にあるガダムガーははっきりとした足跡の彫られた石が崇敬の対象となっているが、石に何となく足跡のようなくぼみがあるだけのものや、それすら見られないガダムガーも存在する。

サッカーハーネは公共の水飲み場である。ブリキで作られた給水器のようなものもあれば、町の建物の壁面などに作り付けられたものや美しい装飾を持つものなど様々な形がある。サッカーハーネをワクフとした人物の名前が冠されることもあるが、多くはアボルファズルを追悼し、その名前が付けられている。

サッカーハーネは本来、公共の水飲み場あるいは水くみ場であるはずだが、テヘランの古いサッカーハーネの一部には既にその水飲み場としての機能を失っているものも見られる。しかし、それでもなお、エマームたちの肖像画を飾り、ろうそくを灯して参詣をする人が多く見られる。また、新しく設置されたサッカーハーネでも、ろうそくを灯したりエマームの肖像画を飾ったりするスペースがある場合、あるいは、そうした場がサッカーハーネの設置者によって設けられている場合、そこが参詣のための場所として機能し出す例が見られる。（写真１、２）

サッカーハーネはテヘラン市部においては再開発のために取り壊されたり、新たに設置されたりするなど変動が激しいため、このレポートにおいては触れないが、郡部においてはそうした変化がほとんど見られないため、調査の対象とした。

(2) ＜聖所＞での行動

上岡はイランの民間信仰について「＜聖所＞を主な場として行われる、信者とひとを超えたものとのコミュニケーションの実態、あるいは信者がその舞台を中心に自分を超えたものに向けるパフォーマンスの総体と考えておいていただくことにする」と述べている[25]。それでは、人々が聖所で「ひとを越えたものとのコミュニケーション」や「自分を越えたものに向けるパフォーマンス」として、＜聖所＞においてどのようなことを行なっているのだろうか。

---

[23] Abū al-Faḍl。 Ḥaḍrate ‘Abbās とも呼ばれる。三代目エマーム・ホセインの異母兄弟で、ホセイン軍の旗手。カルバラーの野でホセイン軍に従っていた人々のためにユーフラテス川から水を運ぶ途中で、ヤズィード軍に殺された。

[24] クルアーンに現れる Khiḍr のことを指すと言われている。緑色の衣を纏っていたとされることから Sabz Pūsh と呼ばれることもある。

[25] 「イランの民間信仰の聖所をめぐって」p.255.

a. ズィヤーラト(ziyārat)

聖所を訪れる(ズィヤーラト)こと

近所の聖所を訪れることも、ゴムやマシュハドをはじめとする遠くにある著名な聖所を訪れることも等しくズィヤーラトと呼ばれる。

「(聖所を) 訪問すること」を表すペルシア語の **ziyārat kardan** は、字義通りには「お目にかかること」「訪問すること」であるが、イランの人々の使用方法を聞く限り、「聖所を訪れて、そこで祈り、願いを訴えること」までがズィヤーラトであり、単に聖所に足を踏み入れるだけではなく、そこで願い事をして初めてズィヤーラトが行われたと認識されているように思われる。

本来なら自身で聖所を訪れるべきであるが、何らかの事情があってそれができないときなどは代参を依頼することも可能である。イランではこれから聖所を訪れる人に、「私のためにドアー[26]をしてきて」と依頼している光景がよく見られる。これは、ズィヤーラトをしようという人についでにドアーを行ってもらうこともあれば、家族や友人などに依頼して聖所へ行ってもらうこともある。

ズィヤーラトは、遠方の著名な聖所であればあるほど価値があると見なされる傾向がある。近所のエマームザーデに詣でるよりも、マシュハドのエマーム・レザー廟へ行く方がずっと価値が高いのである。そのように考える人々のため、旅行社や学校、官公庁などが主催するマシュハドやゴム、シリアへのズィヤーラト・ツアーは多い。こうしたイランという国レベルで、あるいはそれを超えて有名な聖所へのズィヤーラト・ツアー以外にも、学校やマスジェド、各地のバスィージ支部などが主催のズィヤーラト・バスツアーが見られる。これは州内の、あるいは近隣の州にあるいくつかの地域レベルで著名な、あるいは大規模な聖所を巡るというもので、無料あるいは格安であることから人気だとのことである。(写真３)

願いを訴えること

ズィヤーラトをズィヤーラトたらしめている行為こそが、「ひとを越えたもの」に自分の願い(nadhr, nīyat, ārezū)を訴えることと言えよう。この「ひとを越えたもの」とは、一般的には「神 (khodā)」[27]であろうが、「エマームザーデ」であったり、「エマーム」であったりすることもある。そこに葬られているエマームザーデとは関係のない、神やエマームに対して訴えを行う人の方が多く見られる。

願い事の内容は様々である。病気平癒や子授け祈願、合格祈願、求職、幸運を与えて欲しいなどごく個人的な願い事が多い。人に聞こえるようにして願い事を言うことは滅

---

[26] アラビア語の du'ā。個人的な祈りや祈願。アラビア語ではなく、母語で行うことができるとされている。イランでは、ペルシア語をはじめとする母語で自由に祈願をすることもあるが、アラビア語で書かれた何種類かのドアーの定型文のようなものがあり、それを読むことも多い。

[27] イラン国内のペルシア語圏では、一般的に、「アッラー」ではなく、ペルシア語の「ホダー (khodā＝神)」がアッラーを表すために使用される。

多にないが[28]、願い事を書き付けた紙が廟内に置かれているのを見ることがある。(写真4)

願い事を訴えかけるときに使われる言葉は、一般的に、それぞれの人が母語とする言葉であり、アラビア語である必要はない。

聖廟などには「ズィヤーラト・ナーメ(Ziyārat-nāme)」と呼ばれる預言者とその一族に対するアラビア語による称賛の言葉などが書かれた木や石の板、紙が貼られ、それを唱えてから廟へ入り、願い事をすることが正式な作法であるとも言われる。(写真5，6)しかし必ずしもそれは守られておらず、また、建物を持たない、自然物を対象とする聖所には当然ズィヤーラト・ナーメはない。またエマームザーデをはじめとする聖廟を持つ聖所でも、ズィヤーラト・ナーメが置かれていないこともある。

b. 触れること

神への願いを叶えてもらえるよう、あるいは幸運を得られるように[29]、聖者の遺体が持つバラキャトを手にするために対象物に触れることも、ズィヤーラトと切り離すことができない重要な行為の一つである。

これはエマームザーデをはじめとする聖者の廟においてよく見られる。

廟があるならまず廟の入り口で扉などに口づけ、次にザリーあるいはサンドゥーグ[30]、あるいは墓に手で触れ、口づけながら周囲を巡る[31]。

このように、墓石、それを覆うザリーなどに触れることで埋葬されている人物が持っていたバラキャトを得られると考えられている。そのため、何か強い願い事がある人の中には廟の中に泊まり込み、ザリーに触れながら、あるいは自分とザリーをひもで結び、バラキャトを与えて欲しいと願い続ける人もある[32]。(写真 9,10)

---

[28] 実際、どのような願い事をしていたのかを尋ねられてもその内容を他人に教えない人が多い。

[29] バラキャトによって得られる幸運をシャファー(shafā')と呼ぶ。ペルシア語ではよく、「あのエマームザーデはシャファーがある(Ān emāmzāde shafā' dāre)」という言い方で、その聖所が願いを叶える力を持っていることを表現する。

[30] Ḍarī　金属あるいは木で作られた墓を被うための柵。(写真7)

ṣandūq　金属あるいは木で作られた墓を被うための一種の箱状のもの。天井部分が開いているものと完全に箱状になっているものがある。(写真8)

[31] この際、声に出して「ヤー・ホダー（神よ！)」「エイ・ホダー（ああ、神よ！)」などと繰り返しながら口づけをする人も多い。

[32] 被埋葬者の遺体からどのくらいの範囲にバラキャトが広がっていると考えられているのかは明確ではない。しかし、ハラムに入る際、出入り口に口づけをし、ハラム内部に尻を向けないようにして出ていくという聖所での信徒たちの行動から、廟が作られている場合は廟の内部、特にハラムと見なされる部屋の内側に最もバラキャトがあると考えているように思われる。建物がない場合は、バラキャトがあるとされている対象物のみ。

廟の建物の内部がバラキャトの及ぶ範囲と考えられやすいことから、廟や墓石が何らかの理由で壊れあるいは壊されてしまった場合でも、廟の残骸にはバラキャトが残っていると考え、それらに触れることでバラキャトを得ようとする行為が見られることもある。

廟によっては泊まり込んでシャファーを求める人のために寝具が用意されているところもある。(写真14)

また、泊まり込みでやって来る人々のために、宿泊施設(Zā'er-sarā あるいは Zā'er-khāne)が設けられてい

一方、何か特別な願いがなくとも日常生活の中で聖所を訪れることを日課としている人もいる。こうした人々は、聖所を訪れ、ザリーあるいはサンドゥーグに触れ、口付けながらそこを一周するだけで帰って行ってしまう。願い事の有無よりも、そこを訪れ、バラキャトを持つ存在に日常的に触れることが大切であるように見える。そうした考えの延長として、聖所に葬られている人物と常に接していられるようにと、自分の身代わりとなるもの～石であることが多い～を聖所に置く人が見られる。(写真 12)

ザリーあるいはサンドゥーグにかけられている緑色の布を小さく裂き、それを手首に巻くなどして常に身につけていることで、バラキャトの恩恵にあずかることができるとも考えられている。(写真 13)

このように、「触れること」は「人を超えたものに向けるパフォーマンス」の中でもズィヤーラトと共に重要な位置を占めているのである。

現在、一部のルーハーニーたちはこうした信者たちの行為は決して正しいものではなく、聖所に建てられた廟内でニラクアの礼拝を行うことで神は願いを聞き届けてくれると主張する。しかし、現在も残る古い廟を見ると、礼拝を行う場所などないほどに墓石やザリー、サンドゥーグなどで一杯のごく狭い空間しか持たないものも多い。それを見ると、小さな明かり取りの窓から入る外光と、ろうそくやランプの明かりだけに頼った薄暗い空間で、自分の願いを叶える力を持つものと密接に触れ合う空間であることは明らかである。聖廟は本来、信徒が個人的な願い事を叶えてもらうために「ズィヤーラト」をし、「お籠もり」をする場であって、ムスリムが一日五回必ず行うべきと定められた「礼拝」を行う場ではないのである。

c. ダヒール(dakhīl)を結ぶこと・南京錠をかける

必ず行われるものではないが、聖所でよく見られる行為の一つにザリーにダヒールを結ぶ、南京錠をかける、というものがある。

ザリーがないあるいはダヒールを結べる形でないサンドゥーグの場合、廟内にあるアラムやミンバル、サンドゥーグにかけられた布の端、廟の窓枠、廟のすぐ傍に生えている木などにダヒールを結び、望みが叶うようにと願う。(写真 14,15,16,17)

ダヒールに使われる布あるいはひもは特別なものではなく、スカーフや着ているものの切れ端、荷物などを結ぶのに使う紐など何でも良いとのことである。人によっては普段身につけているものの切れ端が一番良いという人もいれば、聖者の墓にかけられている布の一部を裂いて使うのが良いという人もいる。人が結んでいたダヒールに、願い事をしながら結び目を足す人も多い。

ダヒールに使うため、バーザールなどではエマームの一族のしるしである緑色の布が

る聖所もある。こうした宿泊施設は基本的に無料であり、宿泊した人の自発的な支払いによって運営が行われている。また、シャファーに対する感謝の一つとして、ワクフとしてのザーエルサラーを建築する人も多く見られる。

小さく切られて売られている。(写真 18)

南京錠は願掛けをして、ザリーなどに南京錠をかけるものである。願いが叶ったら錠をかけた本人が外しに来るとされるが、実際には外しに来ない人も多く、時々廟の管理人などが取り外しているとのことであった。(写真 19)

d. ろうそくあるいはランプを灯すこと

ダヒールを結ぶことと同じく、多くの聖所でよく見られる行為の一つに、ろうそく(sham‘)あるいはランプ(cherāgh)を灯すことである。

廟の一角に、あるいは廟の外にろうそくを灯すためのシャムダーン(sham‘-dān)が設けられていたり、聖樹の根元にブロックや煉瓦を置き、岩のくぼみを利用してろうそくを灯したり、あるいは願掛けを行う人のためにあらかじめ用意されていたランプに火を入れたりして、望みが叶うようにと願う。(写真 20,21,22,23)

最近は、火事の防止といったことから聖廟内でのこうした行為を禁じ(写真 24)、廟の外にシャムダーンを設けている聖廟も多いが、できるだけ廟に近いところでろうそくを灯したいと、廟の外壁やその近くにろうそくを貼り付けるようにして火を灯している様子も見られる。(写真 25)

e. 聖廟への寄付行為[33]

これはムスリムの義務とされるザカートとは別の自発的な喜捨であるとされ、サダゲ(ṣadaqe)あるいはナズル(nadhr)と呼ばれている。廟の内側あるいは外にサダゲ用の募金箱が用意されていることも多いが、墓石の上に直接お金を置いたり、ザリーの中にお金を投げ込んだりする方が良いと考える人も多い。また、現金以外に金製品など貴金属を寄付する人もいる[34]。これらの寄付は廟を管理するワクフ慈善庁あるいは管理責任者(hei‘at ol-omanā)が定期的に回収し、廟の運営に必要な経費に充てるために管理される。

近年、廟の大規模な改修を行う際などは聖廟の名前で銀行口座を開設し、寄付を募ることも行われている。(写真 26,27)

f. ナズリー(nadhrī)を配ることなど

聖所において願掛けを行う際に、それが叶ったら何らかのお礼をすると誓うことがある。

願いが叶った後にどのようなことをするかは様々である。例えば、人々を招待して食事をふるまったり、お菓子を配ったりすることを聖所内で行う[35]。(写真 28,29) 聖所内

---

[33] komak (ペルシア語で援助の意) と呼ばれることが多い。

[34] 清水直美「エマームザーデ・ダーウードのゴバールービー」を参照のこと。

[35] 満願叶った後のお礼として、聖廟への寄付、あるいはワクフの寄進が行われることもあるが、この場合は特に何か記録がない限り、ナズリーとしての寄付なのかどうか分からないことも多い。また、個人的に食事をふるまう場を設けるのではなく、アーシュラーをはじめとする宗教的な行事に際してふるまわれる

の清掃を毎日行う、現金や貴金属、廟に必要な消耗品を寄付する。廟の付属施設を建設して寄付するといった行為が比較的よく見られる。

g. 占いあるいはまじない

聖所の中あるいは外で占いあるいは一種のまじないが行われることがある。

最もよく見られるのは、聖廟の壁にコイン(sekke)、モフル(mohr)[36]あるいは小石をこすりつけながら願い事をし、モフルが壁に貼り付いたまま落ちなかったら願いが叶うというものである。(写真 30) また、大きな石の上に置かれた小石を手に取り、それが奇数だったら願いが叶うというものなども見られる。

また、子どもが授かるようにと願う女性の中には、布きれでハンモックのようなものを作り、それをザリーあるいは木の枝に結びつけ、その中に石あるいは木の枝を入れておく人がいる。この石あるいは木の枝がハンモックから落ちると願いが叶うとのことであった。(写真 31)

多くの聖廟ではこのように、聖所において人々が行ってきた、あるいは現在でも行っている行為の一部が信仰とは関係のないものであるとして、禁止されるようになってきている。(写真 32,33,34)

本書の中でいくつかの聖所について、「廃墟のように見えるが人が訪れている様子が見られる」としている。これは、近隣の人々へのインタビューから、人々がズィヤーラトの対象としていることが明らかであることが確認できたり、人里離れた場所であるなどしてインタビューが行えなくとも、新しいダヒールが結ばれていたり、新しいろうそくの跡が見られたりすることからそのように判断しているものである。

食事あるいはその材料を寄付することもある。

[36] シーア派の信徒が礼拝に使う素焼きの小さなブロック。人間が土から作られた存在であることを忘れず、謙譲の精神を持ち続けるように、跪拝を行ったときに額に当たる位置に置かれる。

2．＜聖所＞の管理

聖所が自然物である場合はそれほど必要がないが、人々が多く訪れるようになり、信仰の場として建物等を建設し、その場を維持していこうという動きが人々の間に生じた場合、建築、維持、管理を行う人あるいは組織が必要となってくる。

建築、修繕、備品等の補充、管理などに必要な費用の調達や管理、運用、清掃等の日々の管理業務を行うためには、その聖所に対して信仰を持つ人々～多くの場合聖所のある地区・地域の住民である～が協力し合う必要がある。こうして行われる聖所の管理には、国によるものと人々自身による二つのレベルに分けることができる。

(1)　地域住民による管理

a. モタヴァッリー(motavvalī)

地域住民による聖所の管理の方法はいくつかある。

町や村の中にある聖所の場合、モタヴァッリーあるいはハーダム(khādam)と呼ばれる管理人が聖所内に住み込んだり、あるいは近所に住み、廟の鍵を預かり、清掃を行ったり、廟の手入れを行ったりする。

モタヴァッリーは世襲であることも交代制のこともある。また、願掛けをして、それが叶ったお礼に仕事を辞めてモタヴァッリーとなったという人もいる。また時に、夫を失った女性がモタヴァッリーを努めるのを見かける[37]。モタヴァッリーは基本的に無給であるが、ワクフ慈善庁の管理リストにある聖所の場合、ワクフ慈善庁から少額であり、時に数ヶ月にわたって支払いが遅れることがあるが、給料が支払われている。また、それ以外にも、聖所を訪れる人からのコマク[38]が得られることもある。

モタヴァッリーが特に決まっておらず、入り口の扉の鍵がかけられていない聖廟でも、訪れる人がそれぞれに気になったところを掃き清めたり、備品を整理したりと言うことが行われている。樹木をはじめとする自然物を対象としている聖所でも、周辺の清掃やシャムダーンの設置などが、周辺住人などによって自発的に行われている。

b. ヘイアトル・オマナー(hei‘at al-omanā)

聖所が何らかの建物を持ち、それを維持しなければならなくなると、国からの援助があるマスジェドやホセイニーエとは異なり、聖所は基本的に人々からの寄付によっての

---

[37] シーラーズ市内のエマームザーデ・エブラーヒームではモタヴァッリーであった夫が殺された後、妻がその仕事を引き継いでいた。また、テヘラン市内のエマームザーデ・エスハーグでは、イラク人難民の未亡人がモタヴァッリーを勤めていた。その女性によると、自分がエマームザーデ・エスハーグに対して信仰を持っていることと、近所の人たちの好意によるものだとのことであった。

[38] 「援助」「助け」を意味するペルシア語。

み運営されることとなっているため、建設や修繕、必需品の購入のためにお金を集めたり、それを運用したりする必要が出てくる。

そこで、信用のある地域の有力者が、聖所の資金管理や管理・運営の責任者として選ばれる。特に選挙のようなものが行われるわけではなく、地域の中での資産をもとにした位置づけや人望、聖所に対する信仰心などから自然と決まるのだという。

ヘイアトル・オマナーは「ヘイアト＝団体」であるから当然、一人ではなく、数人のグループからなる一種の聖所運営委員会のようなものである[39]。委員長のような代表は特に置かれておらず、メンバーは年齢等により敬意を払われる人物はいても基本的に対等である。そしてこのヘイアトの中の話し合いによって、聖所の維持・管理や、アーシュラーをはじめとする聖所における様々な宗教行事の運営が行われる。

また、聖所がワクフ慈善庁によって管理される場合は、ヘイアトル・オマナーが実際の管理・運営責任者としてワクフ慈善庁によって委託を受けることがほとんどである。そして、ワクフや寄付金等の資産管理業務はヘイアトル・オマナーからワクフ慈善庁へと移され、ヘイアトル・オマナーはワクフ慈善庁に申請を行うことで聖所の維持・管理に必要な金額を受け取る。しかし、ワクフからの収入や寄付金収入以上の支出は認められていないため、廟の建築や修繕などに大きな支出がある場合は、改めて地域住民に寄付を呼びかけるか、融資を受ける必要がある。しかし、融資を受けた場合は当然ではあるが返済義務が生ずるため、大きな収入源がない聖所では融資を受けることができず、工事が中途で止まってしまうことも多い。

(2) ワクフ慈善庁による＜聖所＞の管理

国レベルでの聖所管理の主たるものはワクフ慈善庁によるものである。

ワクフ慈善庁はその名が示す通り、「ワクフあるいは何らかの管理すべき収入や財産」を管理・運用する国の機関である。そのため、この条件に当てはまる聖所に関しては管理業務を行うが、この条件から外れたものについては管理リストから外したり、リストに載ってはいても実質的には管理を行わず放棄したりこともある[40]。

「ワクフあるいは何らかの管理するべき収入があること」が原則であるため、廟を持

---

[39] これはワクフ慈善庁によると、地域住民の代表として人々から集めた資産を管理・運用するため、不正が行われないよう相互監視を行う必要もあるからだとの説明であった。

[40] ワクフや収入があっても、交通が不便な場所にある聖所などは管理人を任命して管理を任せてしまい、ワクフ慈善庁が実際には管理運営に全く関わっていないというケースも見られる。

フィールーズクーフ事務局のリストを見ると、完全に廃墟となってしまった二つのエマームザーデの名前に線が引かれており、管理を止め、管理リストから削除したことが明らかである。

しかしその一方で、シェミラーナート事務局が管理しているエマームザーデ・アズィーズは、現在シャヒードベヘシュティー大学の構内にあり、学生以外の入構が難しいために訪れる人もほとんどおらず、収入もほとんどないとのことであるが、ワクフ慈善庁が財政援助を行い、管理が行われている。この理由について同事務局に質問をしたが、明確な回答が得られておらず、現時点ではどうして援助が行われているのかは分からない。

つ聖所が管理の主な対象となり、人々の崇敬を集めていてもワクフを持たず、寄付が行われない樹木や岩などの自然物に関しては管理の対象とはならず、地元の人々による自発的な管理に任される。

a. 資産管理

ワクフ慈善庁によると、国などから建築・修理などに対する援助があるモスクと違い、聖廟はほぼ完全に、人々からの援助によってのみ維持・運営されている。そのため、人口の多い都市部にある聖廟はそれなりの収入を得ることができるが、郡部、特に村にある聖廟の収入は村の人口や産業といった地域社会における諸情況の変化の影響を受けやすい。

聖廟に対して寄進された土地をはじめとするワクフは、ワクフの種類、用途などがワクフ慈善庁によって登録され、管理をされる。ワクフは商店やアパート、畑やバーグなど様々である。聖廟に置かれるザリーやコーランを置く棚などもワクフとして登録されていることがある。(写真 35,36)

ザリーあるいはサンドゥーグに投げ込まれたり、寄付金箱に入れられたりする人々からの寄付金などは１～２ヶ月に一度、ワクフ慈善庁によって集められ[41]、管理される≈。ワクフ慈善庁はあくまでこれらの資産を管理するだけであり、使用についてはヘイアトル・オマナーが決定し、ワクフ慈善庁に申請する。基本的に、収入以上の支出は認めず、国家予算を使っての援助は行わないとのことである。

b. 文化財保護庁(Sāzmāne Mīrāthe Farhangī)との協力

聖廟の一部には、文化財保護庁によって文化財の指定を受けているものがある。これらの廟を改修したり増築を行ったりするためには慎重な取り扱いが要求され、文化財保護庁との協力が必要になる。ワクフ慈善庁の説明によると、こうした文化財としての指定を受けている廟の修理を行うときなどは必ず文化財保護庁に連絡し、双方の専門家によって話し合いを行いながら仕事を進めているという[42]。

しかし実際には、建物を修理しながらもできるだけ原型を維持しようとする文化財保護庁と、現代風の建築にしたい地元の人々の間で意見が対立することもあるという。

また、聖廟を管理する人たちによると、文化財保護庁が発掘や調査を行った後、墓石を持ち去ったり、発掘した後を戻すことなく放置したりするために聖廟が荒れてしまうことがあるというが[43]、ワクフ慈善庁が何らかの措置を取るということは見られない。

---

[41] 清水直美「エマームザーデ・ダーウードのゴバールービー」を参照のこと。

[42] こうした場合の費用の負担は、基本的に聖廟側にあるとのことである。文化財保護庁が調査を行ったり専門家を派遣したりする場合の費用は文化財保護庁が負担するとのことである。

[43] これについて文化財保護庁に問い合わせてみたが、そのようなことはあり得ないとの回答であった。墓石などをワクフ慈善庁をはじめとする管理者たちの許可無しに持ち帰ることなどはあり得ず、また、埋め戻しも必ず行っている。恐らく、盗掘を行った人たちが文化財保護庁の名前をかたっていたのではないか、

(3) 文化財保護庁による管理

文化財保護庁も一部の聖所の管理を行っている。この場合は、収入のあるなしにかかわらず、「イランにおける文化財としてふさわしいもの」としてイランの文化財登録されたものについて、管理・維持が行われることとなっている。

しかし、実際にはすべての文化財に管理人を置くこともできず、登録文化財の情況を正しく把握していないこともある。あるいは全く管理ができないまま放置されている聖所もあり、そのため、文化財に対する理解のない人々による破壊や、価値を損なうような補修や増改築が行われてしまうことも多い。また、財宝探しを目的とする人々の行う盗掘による被害は全国的に深刻である。

近年、文化財保護庁は「収入になる」遺跡や史跡を修理して観光収入を得ることに力を入れている。しかし、＜聖所＞に関しては、収入が見込める大きな聖所はほとんどがワクフ慈善庁の管理下にあり、文化財保護庁にとっては何の収入にもならない。また、ワクフ慈善庁の管理リストに入っていない聖所でも、聖所という性格上、その聖所のために人々が支払った寄付金を他に流用したり、入場料を徴収したりすることはできないため、真剣に維持管理を行っても文化財保護庁にとってそれほどメリットがないということになる。そのため、管理がおざなりになる傾向がある。

との事であった。

3．テヘラン州の＜聖所＞

「ひとを越えたものとのコミュニケーション」や「自分を越えたものに向けるパフォーマンス」行為が見られ、人々が聖所として認識している、あるいはしていた場所はイラン国内に数多く見られるが、テヘラン州にも多い。統計資料によって数値にばらつきがあるため正確な数は分からないが、全国で五指に入る州であるとのことである[44]。

(1) ワクフ慈善庁によるテヘラン州の区分と管理下にある＜聖所＞

テヘラン州における＜聖所＞の調査を行うに当たり、基礎資料としたのがワクフ慈善庁の持つリストであった。

それぞれの事務局が管理している聖所の数は表の通りである。（表１）

ワクフや寄付を管理することが主要な業務であるワクフ慈善庁テヘラン支部の各事務局は、ワクフや寄付の多い都市部に多く、郡部では少なくなる。そのため、テヘラン州の行政区分とは異なっている部分もある。（図１）

今回はワクフ慈善庁テヘラン支部各区事務局の資料を基に調査を行ったことから、「郡」ではなく「区」という呼び方を採用した。

(2) テヘラン州の＜聖所＞リスト

ワクフ慈善庁の管理する聖所のリストの他に、文献資料や地図に見られる聖所の名前や、現地の人々の情報を頼りにして、テヘラン州内で筆者が訪れた聖所をまとめたものが表２である。時間的地理的な問題があって訪れることができなかったサーヴァジボラーグ区のシャー・モハンマド[45]とピール・ヴェシュテ以外はすべて実際に訪れ、現在の状況を簡単にではあるが確認している。この表に載せたもの以外にも多くの聖所があると思われるが、2007 年９月までの時点で筆者がその存在あるいは痕跡が確認できたものの一覧である。ごく簡単なメモに過ぎず、また名称や血統などの確認などを含めたまとめの作業に時間がかかってしまったため、情報として少し古くなってしまっている部分もあるかもしれないが、聖所に関心を持つ方の参考になれば幸いである。

---

[44] 例えば、Āqā Sharīf, Aḥmad, *Emamzāde*, Nashre Shahīd Sa'īd Moḥebbī, Tehrān, 1384S.H./2005-6, pp.11-12. における統計によると、テヘラン州の聖所は 333 カ所で、イラン全州の中で五番目の数値となっている。

[45] このエマームザーデは最寄りのキャルキャブード村から徒歩で半日はかかるという山の中にあり、村の人の案内がなければ道に迷う可能性があると注意をされ、準備がなかった当日は断念せざるを得なかった。

また、Gītā-shenāsī 社発行のテヘラン州地図によるとフィールーズクーフ郡デフギャルダーン村にエマームザーデ・エブラーヒームという聖所があるが、廟の存在する地域を管理している環境保護庁によると、以前はテヘラン州だったが現在はセムナーン州となっているとのことであるので、テヘラン州のリストには含めなかった。

一覧の中で用いている名称は、基本的にワクフ慈善庁や文化財保護庁のリストなどに登録された正式な名称を用い、通称を括弧内に記した。そうしたリストや文献に正式な名称が記録されていない場合は、基本的に、現地の人々が用いている名称を使用している。

発音については、基本的に、現代ペルシア語の標準的文語発音を使用している。

聖所の名称については、基本的にワクフ慈善庁のリストや文献資料にあるものを優先している。近年、ワクフ慈善庁をはじめとする機関では、エマームあるいはエマームザーデと関連を持つ人物が葬られているとされる聖所に関しては、「エマームザーデ」という名称で統一される傾向があるが、現地ではエマームザーデではなく、「シャーザーデ」や「ズィヤーラトガー」といった名称が使われているというケースも見られる。このような場合は、文書上の正式名称である「エマームザーデ」の後に、現地で使われている名称を続けている。また、資料上の正式な名前と現地で呼ばれている名前が異なっている場合がある。そのような場合は、正式な名前を優先し、現地での名前を説明文の中で紹介している。

聖所の所在については、町の中にあり、住所が明確な場合は住所をしるし、町や村から離れた場所にあるものに関しては最寄りの町あるいは村の名前で記載した。また、イランのワクフ慈善庁から、所在は緯度・経度で示すようにとの指示があったため、調査途中から GPS を用いて計測を行い、その数値も併記している。しかし、ワクフ慈善庁あるいは文化財保護庁が発表している数値がある場合はそちらを用いている。また、測定を行った場所が数メートル違うだけでも数値に差が出るため、秒の単位の小数点以下は四捨五入した。

郡部の聖所の位置を示すため、簡単なものではあるが地図を作成、添付した[46]。（地図1～12）イランでは道路建築が大変な勢いで行われている一方で、地図の改訂がなかなか行われないため、一部地域では、地図と実際の道路が変わってしまっていることがある。しかし、それらの全てを確認することは物理的に不可能であったため、古い道路情報を使わざるを得なかったが、ご寛恕いただきたい。

筆者は建築については専門外であるため、廟の建築的な詳細についてはここでは触れない。ただし、廟のオリジナルの建築年代、あるいは聖所の起源と考えられる年代などについては、筆者の今後の研究と関連するために分かる範囲で示している。

---

[46] *Naqsheye Siyāsī va Eqtesādīye Ostāne* Tehrān, Gītā Shenāsī.を郡部ごとに分割して利用した。

(3) テヘラン州の地理的条件

テヘラン州は、イランの首都テヘランを中心としてアルボルズ山脈の南麓に広がり、北はマーザンダラーン州、南はゴム州、東はセムナーン州、南はゴム州とマルキャズィー州、西ではガズヴィーン州と境を接する。面積は約 18,814 平方キロメートルで、北緯 34 度から 36.5 度、東経 50 度から 53 度にかけて広がっている、面積としてはイラン国内でもそれほど大きな州とは言えない。しかし、首都テヘランを抱えており、イラン全国の人口の約 15 パーセント以上がこの州に集中している。経済の中心地としての性格故に、就業の機会を求めて流れ込む他州からの人口と、不法滞在の外国人の増加も著しく、テヘラン州における聖所のありかたに大きな変化をもたらしている。

テヘラン州の気候的な特徴は、アルボルズ山脈の山裾に広がっていることから、州の中での高低差が大きい。高度 2000 メートルを超える村も多くあるフィールーズクーフ区やサーヴォジボラーグ区ターレガーンのようなアルボルズ山脈中の寒冷な気候を持つ高原から、南のヴァラーミーン区やロバーテ・キャリーム区のようなキャビール性の気候を持つ地域まで多様である。

テヘラン市周辺部には自動車や製菓などの工場も多く、また増え続ける人口に対応するための大規模団地も多く造られている。しかしその一方で、郡部の主たる産業は農業である。ヴァラーミーン郡やロバーテ・キャリーム郡など広い平地が広がる場所では小麦や野菜が作られ、ダマーヴァンド郡をはじめとする山間部では寒冷な気候を利用した果物やナッツ類といった商品作物の生産が盛んである。

(4) テヘラン州各地の＜聖所＞

(a) シェミーラーナート区 (Shemīrānāt)

テヘラン北部地区。古くは現在のラヴァーサーンも含めてシェミーラーナートと呼ばれていたが、現在シェミーラーナート(あるいはシェミーラーン)と言った場合、テヘラン市北部(テヘラン市第一区と第二区の一部)を指す。

以前は、村が点在する地域であったが、テヘランが膨張するに従ってテヘランに吸収されてしまい、以前の村は地区として名前を残すのみとなった。また、テヘラン市となる前は農業と牧畜が主たる産業であったが、現在は果樹園などのほとんどが高級住宅地となっており、今も残る渓谷はテヘランの人々が手軽に訪れることができるピクニック地となり、休日になると水と緑を求めるテヘラン市民で一杯になる。

(1) Emāmzāde Ebrāhīm (写真 37,38)
Darband – Pas Qal‘e

az navādegāne Emām Ḥasan Mojtabā[47]

Touchāl 渓谷の中にあり、夏でも涼しく、テヘランの人々がピクニックに多く訪れる。渓谷への入り口はおみやげ物屋やレストランなどが建ち並び、住宅地としての開発も進んでいる。

廟の周囲には古い墓地が広がっている。現在は埋葬は禁止されているとのこと。

廟の前に水が湧いている。現在はコンクリート製の池状に整えられている。

村からは谷を挟んで向かい側にあたっていたらしい。[48]

現在は土産物屋や食堂が廟のすぐ近くまで建ち並んでいる。

(2) Emāmzāde Shāhzāde Seyyed Moḥammad Valī (写真 39,40)

Darake – be ṭarafe Dehe Emāmzāde Moḥammad Valī

az navādegāne Emām Zein al-'Ābedīn[49]

Darake 渓谷の奥。

現在、以前の建物を壊し、新しい廟を建築中[50]。

ダラケ村はテヘラン市民のピクニック地として週末などは訪れる人も多く、村の中心を流れる渓谷沿いにはレストランが建ち並ぶ。。

(3) Emāmzāde Panj tan (写真 41,42,43)

Lavīzān - Khiyābāne Farshad

Emāmzādegān Sālem, Abū Ṭāleb, Reḍā va Raḥīm Sheith b. Emām Mūsā b. Ja'far[51]

現在、以前の廟を壊し、新しい廟を建築中。

オリジナルの廟はガージャール朝時代のものだった。現在もその当時の木製のザリーが、廟の片隅に置かれている。廟内のザリーは金属製の新しいものに取り替えられている。

(4) Emāmzāde Gheibī (写真 44)

Lavīzān Parke Būstān

ワクフ慈善庁のリストの中には名前が見られる。

---

[47] Sarvqadī, Moḥammad Ja'far, *Boqā'e Motabarreke Ostāne Tehrān*, Edāreye Kolle Ouqāf va Omūre Kheirīyeye Ostāne Tehrān, Tehrān, 1384S.H./2005,p.19.

[48] Moṣṭafavī, Seyyed Mohammad Taqī, *Āthāre Tārīkhīye Ṭehrān : Amākene Motabarreke*", Anjomane Āthār va Mafākhere Farhangī, Tehrān, 1361S.H./1981, p.237.

[49] Sarvqadī,p.31. Moṣṭafavī によると、第四代目イマーム・サッジャードから四世代目にあたる。(pp.226-227)

[50] 取り壊された古い廟は、ガージャール朝時代のものとされる。(*Pazhūhesh-nāme*,p.47) cf. Pazhūheshgāhe Farhang va Honarīye Eslāmī, *Dāyerat ol-Ma'ārefe Banā-hāye Tārīkhīye Doureye Eslāmī (Banā-hāye Āramgāhī)*, Houzeye Honarī, Tehrān, 1376S.H./1997-8, pp.208-209.

[51] Sarvqadī, p.22. Moṣṭafavī, pp. 226-7, 239. Pazhūheshgāhe Farhang va Honare Eslāmī (1378S.H./1998) *Dāyerat al-Ma'ārefe Banāhāye Tārīkhīye Doureye Eslāmī (Banāhāye Ārāmgāhī)*, Tehrān, p.205.

現在は公園になっており、廟の痕跡も残っていない。40 年ほど前には小さな石造りの廟があり、参詣者は傍らの大きなトゥートの木にダヒールを結び、ろうそくを灯していたとのこと。

その後どうして廟が壊され、公園となってしまったかについては明確な理由を知っている人を見つけることはできなかった。

Emāmzāde Panj tan のすぐ近くで、Emāmzāde Panj tan のヘイアトル・オマナーや参詣者の一部はこのエマームザーデについて記憶していた。

(5) Emāmzāde ‘Alī Akbar (写真 45,46)

Meidāne Chīdhar - Meidāne Zar

(北緯 35 度 47 分 8 秒、東経 51 度 27 分 44 秒、標高 1547 メートル)

Emāmzāde ‘Alī Akbar b. Emām Zein al-‘Ābedīn[52]

現在はメイダーン状になっている場所。

古い墓地があったが、現在は整備され、殉教者墓地となっている。殉教者以外の埋葬は現在は行われていない。

廟は最近改築され、新しい金属製のザリーが置かれている。改築により、ホセイニーエが併設された。

(6) Emāmzāde Esma‘īl (写真 47,48,49)

Bozorgrāhe Ṣadr - Ba‘d az Khiyābāne Dībāchī

(北緯 35 度 47 分 67 秒、東経 51 度 27 分 53 秒、標高 1546 メートル)

Emāmzāde Esma‘īl b. Zakariyā (Emāmzāde Esma‘īl b. Emām Mūsā)[53]

Emāmzāde ‘Alī Akbar の近く。道路からは下がったところにある。

古い墓地と、古いチェナールの大木。

現在は改築が進み、廟の隣にホセイニーエが併設されている。オリジナルはナーセロッディーン・シャー時代のもの。

(7) Emāmzāde Qāsem (写真 50,51)

Kiyābāne Darband - MeidāneEmāmzāde Qāsem

az navādegāne Emām Ḥasan Mojtabā[54]

---

[52] Moṣṭafavī, p.238. Sarvqadī は、この Emāmzāde ‘Alī Akbar と Emāmzāde Esma‘īl を取り違えている。(p.20) 両者は徒歩で行くことができるほどの距離ではあるが、血縁関係はないという。

[53] Moṣṭafavī, pp.238-9. Moṣṭafavī による血統 Emāmzāde Esma‘īl b. Zakariyā と、廟内のズィヤーラトナーメに書かれた血統 Emāmzāde Esma‘īl b. Emām Mūsā との間に相違が見られるが、どちらが正しいものなのかは確認できない。

[54] Āyatollāh Najafī Mar‘ashī によると、Emāmzāde Qāsem b. Ḥasan b. Zeid b. Ḥasan b. ‘Alī b. Abī-Ṭāleb となっているが、(Mūsāvī, Seyyed Aḥmad, *Āshenāī bā Solāleye Pākān Emāmzāde Ṣāleḥ (Tajrīsh) va Emāmzāde Qāsem*

Golāb Darre の丘の上。現在はテヘランの町が廟の周辺にも伸びてきている。夏などはテヘラン市内から暑さを避ける人々が多く訪れる。

現在、ドームなどをはじめとする改修が行われているが、オリジナルは、サファヴィー朝時代、シャー・タフマースプ時代のものと考えられている。[55]

何度かの改修を経て、現在は男性用と女性用のシャベスターン、ザーエルサラーなどを持つ。

(8) Emāmzāde Ṣāleḥ (写真 52,53)

Bāzāre Tajrīsh

Emāmzāde Ṣāleḥ b. Emām Mūsā

タジュリーシュのバーザールの傍らに建つ、テヘラン市内で最もズィヤーラトの人が多いエマームザーデの一つ[56]。入り口に置かれた貸しチャードルを借りてハラムへと向かう女性の多さから、バーザールに買い物に来た人がそのついでにズィヤーラトをしていくという様子が非常によく分かる。パキスタンやアフガニスタンから訪れる人もいるとのこと。

オリジナルの廟は/13-14 世紀に遡ると考えられる[57]。

繰り返し改修が行われてきているが、2005 年からもドームのタイルの貼り替えなど大規模な改修が行われている。

以前は、廟の傍らにチェナールの大木があり、人々の崇敬の対象となっていたが[58]、現在は切り倒され、廟を管理するヘイアト事務所となっている。

(9) Emāmzāde Ṣāleḥ (写真 54,55)

Faraḥezād – Shahrake Īthārgarān – Khiyābāne Avvale Emāmzāde

Emāmzāde Ṣāleḥ b. ʻAlī b. Emām Ḥosein

現在大規模な改修中。本来の廟は、大きな木製のザリーを囲む小部屋とドームを持つだけの小さなものだが、男女別の広いナマーズハーネ、台所などを備

(Shemīrān), Enteshārāte Tūrang, Tehrān, 1378S.H./1999-2000, p.78.) これについては異論もあり、確証はないが (Moṣṭafavī, pp.232-233)、このように信じられている。

[55] Moṣṭafavī, pp.228-233. Sarvqadī, p.29. 廟内の木製のサンドゥーグには 963/1555-6 の年号が見られる。*Banā-hāye Āramgāhī*, pp.201-202.

[56] ズィヤーラトに訪れる人のため、図書館、書店、駐車場、トイレ、ザーエルサラーなどの建築が勧められている。

[57] Moṣṭafavī, p.233. Sarvqadī, p.26. ガージャール朝時代に改修、増築が行われている。 Sarvqadī はイルハン朝時代の建築との類似性を指摘している。現在、廟内に置かれている金属製のザリーは新しいものであるが、その中に古い木製と金属製のザリー、木製のサンドゥーグが置かれており、これらにはガージャール時代の年代が見られる。*Banā-hāye Āramgāhī*, pp.176-177.

[58] Moṣṭafavī, p.233. このチェナールについて Moṣṭafavī はイランで最も古いチェナールと見なしている。(p.237).

えた大規模な廟になる予定[59]。廟のオリジナルの年代ははっきりしないが、986/1578-9 年の碑文が廟内に残っている。

ファラヘザードの東端。以前は、周囲はすべてバーグだったそうだが、現在は高層アパートなどが建ち並ぶ新興住宅地となっている。

ここからファラヘザード村を横切って、エマームザーデ・ダーヴード街道が西へと延びている。

廟の前には墓地が設けられ、家族用墓の建物も設けられているが、現在は埋葬は禁止されているとのこと。

(10) Emāmzāde Abū Ṭāleb (写真 56,57)

Faraḥezād - Entehāye Jādde Qadīm Emāmzāde Dāvūd

Emāmzāde Abū Ṭāleb b. Faḍr b. Zeid b. ‘Alī b. Emām Ḥosein

ファラヘザードの西端。キャン区にあるエマームザーデ・ダーヴードへの昔の登山口にあたる。ここから一日かけて、あるいは山中で一泊して参詣したとのことである。

村の墓地が廟の南側に広がり、北側はすべてバーグ[60]。

廟の敷地内の水槽の水はガナートによって引かれてきたものとのこと。

オリジナルの廟はサファヴィー朝時代のものと考えられるが、ガージャール朝時代に何度か改修されている[61]。

小さなハラムには、周囲を巡るのが精一杯なほど大きな木のザリーが置かれている。

(11) Emāmzāde Esma‘īl (写真 58,59)

Qolhak - Do-rāhe Qolhak - Pārke Zargande

Emāmzāde Shāhzāde Esma‘īl b. Ebrāhīm b. Mūsā b. ‘Abd al-Laṭīf b. Morteḍā b. Sharaf al-Dīn ‘Alī b. Fakhr al-Dīn Ḥasan b. ‘Alā al-Dīn Morteḍā b. Fakhr al-Dīn Ḥasan b. Jamāl al-Dīn Mohammad b. Ḥasan b. Abī Zeid b. Qāḍī ‘Alī al-Hādī b. Abī Zeid b. ‘Alī Kiyākei b. ‘Abdollāh b. Qāḍī al-Qoḍḍāt Sharaf al-Dīn Ebrāhīm b. Esma‘īl al-Monaqqadī b. Ja‘far Moṣaḥḥeḥ b. ‘Abdollāh b.Sharaf al-Ashrāf Fakhr al-‘Alaviyān al-Qodve al-Feqh va al-Ḥadīth va al-Nassābe al-Moḥaddeth Abī ‘Abdollāh al-Ḥasan al-Aṣghar b. al-Seyyed al-Sajjād Zein al-‘Ābedīn ‘Alī b. al-Ḥosein b. ‘Alī b Abī Ṭāleb

以前は周囲はすべて墓地だったそうだが、現在は公園になり、その一角に

---

[59] 古い廟の様子については Moṣṭafavī が詳細に報告している。

[60] Moṣṭafavī が紹介している人々の信仰を集めているチェナールの古木は確認できなかった。

[61] Moṣṭafavī, p.213-4. *Banā-hāye Āramgāhī*, p.95.

廟が建っている。

859/1454-5 年に殉教し、ここに葬られたとされている。

以前の建物は全て取り壊されて新しいものとなっており、ザリーも金属製の新しいものとなっている[62]。

(12) Emāmzāde Moṭayyeb (写真 60,61)

Evīn - Kūcheye Ḥoseinīye - Kūcheye Emāmzāde

Emāmzāde Moṭayyeb b. Zeid b. Moḥsen b. Emām Mūsā

廟そのものは最近作られたもので、オリジナルの時代特定はできない[63]。

墓地が設けられているが、現在は埋葬は禁止されている。

村の中心を走る道路から坂道を登ったところにあり、以前は、周囲はすべてバーグだったとのこと。すぐ近くに大きなマスジェド、ホセイニーエが新しく建設されている。

(13) Emāmzāde ʻAzīz (写真 62)

Dākhele Dāneshgāhe Shahīd Beheshtī

Emāmzāde ʻAzīz b. Moḥsen b. Emām Mūsā

Emāmzāde Moṭayyeb は甥にあたる。

以前はバーグの中にあったが、現在はシャヒード・ベヘシュティー大学の敷地内になっている。大学構内には学生以外が入構しにくいため、収入がほとんどないが、ワクフ慈善庁が援助を行い、管理を行っているとのこと。

周囲には古い墓が散らばっている。

廟のオリジナルはガージャール朝時代のものと考えられている[64]。

廟の色が赤味を帯びていたことから、エマームザーデ・アナーリー＝柘榴(色)のエマームザーデ・ダーヴードと土地の人は呼んでいたというが、外部からの流入人口が多い現在、そのような呼び方を知っている人はほとんど見つけられなかった。

管理者を見つけられず、廟の中を見ることはできなかった。

(14) Emāmzāde Abū al-Qāsem (maʻrūf be Qāḍī al-Ṣāber) (写真 63,64,65,66)

Dehe Vanak - Poshte Dāneshgāhe al-Zahrā - Kūcheye Emāmzāde

Emāmzāde Abū al-Qāsem ʻAlī b. Mohammad b. Naṣr b. Mahdī b. Mohammad b.

---

[62] Sarvqadī, p.21.

[63] Moṣṭafavī, pp.224-5. Sarvqadī, p.31. *Pazhūhesh-nāme* においてはガージャール朝時代のものであるとされている。(p.47)

[64] Moṣṭafavī, pp.225-6. Sarvqadī, p.29. Moṣṭafavī は、廟の近くにガージャール朝の二人の王子の墓があるとしているが、見つけることはできなかった。*Banā-hāye Āramgāhī*, pp.190-191.

‘Alī b. ‘Abdollāh b. ‘Īsā b. ‘Alī b. Ḥosein al-Aṣghar b. ‘Alī b. al-Ḥosein b. ‘Alī b. Abī-Ṭāleb

Vanak 村の中心から細い小路を入ったところ。周囲はバーグ。

この場所で生まれた学問に優れた人だったとのこと。そのため Qāḍī と呼ばれた。

1302/1884-5 年にナーセロッディーン・シャーの宰相であった Mīrzā Yūsef Mostoufī al-Mamālek によって建てられた廟[65]。

当時のままの木のザリーやタイル。廟は塀によって通りと隔てられているが、入り口の扉などもその当時のものだとのこと。

建物の裏手には墓地があり、チェナールの木などが生えている。それらの木の一部にダヒールが結ばれている。

(b) ジョヌーベ・シャルギー区 (Jonūbe Sharqī)

(15) Seyyede Malek Khātūn[66] (写真 67,68,69)

Khiyābāne Khāvarān - Khiyābāne Shahīd Barādarāne Sajjādī

(北緯 35 度 39 分 226 秒、東経 51 度 27 分 54 秒、標高 1143 メートル)

Seyyede Malek Khātūn b. Emām Mūsā (yā b. al-Reḍā)

Mādare Mo‘ayyed al-Doule va Fakhr al-Douleye Deilami

テヘランからセムナーン、ホラーサーンへ向かって伸びていた街道沿い。

オリジナルの廟はガージャール朝時代ファトフアリー・シャーの時代のもの[67]。現在は改修が行われ、ナマーズハーネなどが増築され、また、敷地内も公園として整備されており、子供を連れた家族連れでにぎわっている。

2001 年まではガージャール朝時代の木製のザリーが置かれていたが、損傷が激しいために廟の改修と同時に、金属製のザリーに取り替えられた。

ホルダード月 15 日の蜂起で亡くなった人たちの墓が廟の横手・裏手に設けられているが、墓地は現在は埋葬禁止とのこと。

(16) Ahl b. ‘Alī (写真 70,71)

Khiyābāne Khāvarān - Īstgāhe Amīr Soleimānī - Khiyābāne Khājū Kermānī

(北緯 35 度 39 分 50 秒、東経 51 度 27 分 29 秒、標高 1158 メートル)

Seyyede Malek-Khātūn からも近いホラーサーン街道沿い。

---

[65] Moṣṭafavī, pp.211-213, 235. Sarvqadī, p.30 *Banā-hāye Āramgāhī*, p.203.

[66] Seyyede とあるが、預言者の血を引く人々に与えられる敬称の Seyyed とは関係なく、laqab である。

[67] Moṣṭafavī は、バーザール内にある Seyyed Valī との類似性を指摘し、同じ人物によって建てられたものであろうと指摘している。Moṣṭafavī, pp.240-241. Sarvqadī, p.33. *Dāyerat al-Ma‘ārefe Zane Īrānī*, jelde avval, pp.199-200. *Banā-hāye Āramgāhī*, p.293.

血統に関しては、廟内のズィヤーラトナーメや廟内のタイルに書かれた詩ではエマーム・アリーの子孫ということになっているが、エマーム・ハサン・モジタバーの子孫という説もある[68]。

現在、敷地の一部は公園になっており、子供たちのための遊具が置かれている。

公園と廟の間に古い墓が少し残っているが、ほとんどは掘り返し、公園にしてしまったとのことで残っていない。廟のオリジナルはサファヴィー朝時代のもの[69]。

(17) Gheibī (写真 72)

Entehāye Khiyābāne Jahān Panāh

現在はマスジェドになっている。以前、ズィヤーラトガーだった場所はただの床となっており、作業をしている人の中にはそこがズィヤーラトガーだった場所とは知らない人も多かった。近所の人に尋ねても、古くから住んでいる人はその存在を知っていたが、現在そこがズィヤーラトガーでなくなってしまったことに関してはそれほど残念には思っていないという答えも多かった。

(18) Bībī Shahr Bānū (写真 73,74,75,76,77)

Shahre Rey - Amīn ābād

サーサーン朝最後の王ヤズドギルト三世の娘でエマーム・ホセインの妻、第四代目エマーム・ゼイノルアーベディーンの母と言われる[70]。

レイの郊外の山腹。最も古い部分はサーサーン朝時代のものと見られる。現在の形の基本ができたのはサファヴィー朝時代と考えられている。その後、ガージャール朝時代にも改修が行われている[71]。

廟へ登る階段の途中に小さな泉が湧いており、ここにろうそくを灯し、ナズルを行う人も多い[72]。

墓石の上のザリーは近年、金属製のものに取り替えられた。

今日は男性も廟内に入ることができるが、以前は女性のための聖所であり、男性が立ち入ることはできなかった[73]。

---

[68] Sarvqadī, p.22. Moṣṭafavī, pp.241-242.

[69] *Pazhūhesh-nāme*, p.46

[70] もちろん史実として確認できる史料等はないのではあるが、これを信じるイラン人は多い。

[71] Sarvqadī, p.101. Moṣṭafavī, pp.130-139. *Banā-hāye Āramgāhī*, pp.258-261.

[72] Moṣṭafavī は『ダヒールの結ばれた葉や枝の少ないトゥートの木』について言及しているが、筆者が訪れた際には確認できなかった。

[73] Bāstānī Pārīzī, Moḥammad Ebrāhīm, *Khātūne Haft Qal'e*, Rūze Bahā, Tehrān, 1344H.S., p.183.

(19) Boq'e Chehel tan (写真 78,79)

Khiyābāne Khāvarān - Dulāb - Pārke Chehl tan

(北緯 35 度 40 分 6 秒、東経 51 度 27 分 88 秒、標高 1160 メートル)

廟の来歴に関しては明らかではない。

近年、改修されているが、オリジナルはサファヴィー朝以前のものと考えられている。ドーム部分はガージャール朝時代のもの[74]。

現在は公園の一角にあり、近年発見された無名兵士のための墓地が廟の正面に作られている。

廟の中は小さな緑色の布をかけた墓石があるだけの空間。集団礼拝の時に使う絨毯が大量に置かれている。木曜日の午後のみ廟を開けるとのことだが、廟の三方にある窓や扉の金属の柵にダヒールを結び、南京錠をかける人、壁面に据え付けられたシャムダーンにろうそくを灯す人は普段から多く訪れている。

(c) ジョヌーブ区 (Jonūb)

(20) Emāmzāde Zeid (写真 80,81,82,83,84,85)

Sabze Meidān - Entehāye Bāzāre Kaffāshī

Emāmzāde Zeid b. 'Alī b. al-Ḥosein[75]

バーザール内にあるテヘラン市内で三番目に古いエマームザーデ。バーザール商人たちの崇敬を集めており、礼拝の時間帯になると次々に人々が訪れ、礼拝を行っていく。

現在の建物はガージャール朝時代のもの。2001 年から大規模な改修が行われ、タイルの貼り替えやアーイーネカーリーの張り替えなどが行われている。

墓を覆うサンドゥーグには 902/1496-7 年の年号が見られる[76]。 サンドゥーグを覆う金属製のザリーはガージャール朝時代のもの。

廟内にはガージャール朝の Lotof-'Alī Khān の墓もあるが[77]、特に案内もなく、ズィヤーラトの人々はその存在に注意を払っていない。

(21) Seyyed Esma'īl (写真 86,87)

Khiyābāne Moṣṭafā Khomeinī - Meidāne Seyyed Esma'īl

Seyyed Esma'īl az aḥfāde Emām'Alī al-Naqī

---

[74] Moṣṭafavī, pp.239-240.

[75] エマームザーデにおける説明ではこのようになっていたが、*Banā-hāye Āramgāhī* では、エマーム・ハサンから 10 代目の子孫とされている。

[76] Moṣṭafavī, pp.22, 50-63. Sarvqadī, p.25. Hastī Khājūī, " Emāmzāde Zeide Tehrān", *Mīrāthe Jāvīdān*, 8, 1373S.H./1994-5, pp.74-76. *Banā-hāye Āramgāhī*, pp.122-123.

[77] *Khātūne Haft Qal'e*, p.400.

バーザールの北東端。

建物のほとんどは、1262/1846 年にガージャール朝のモハンマドシャーの時代に建てられたもの。しかし、ハラムの一部、西側の象眼は碑文によると 886/1481-2 年のものであり、テヘラン市内で最も古い年代のズィヤーラトガーである[78]。

近年改修が断続的に行われているが、2001 年にエイヴァーンをアーイーネカーリーにしようとしたところ、文化財保護庁からの横やりが入り、工事が止まってしまったとのことであった[79]。

マスジェド、神学校と隣接している。

(22) Seyyed Valī (写真 88,89)

Sabze Meidān - Kūcheye Seyyed Valī

Seyyed Valī b. Moḥammad al-Taqī al-Javād

バーザールの中。マスジェド、神学校の南東部の一角となっており、マスジェド側の出入り口は礼拝の時間以外は閉められており、横手の小路から入らなければならない。

近年マスジェドの改築に伴って、廟も改築された。オリジナルはマスジェドも廟もほぼ同時代のもので、ガージャール朝時代のものとみなされている[80]。現在は、神学校の寮も隣接して建てられている。

廟の建設当時のものと考えられている木のザリーが置かれていたが、現在は金属製の新しいものに取り替えられている。

(23) Emāmzāde Chehel tan (写真 90,91)

Nazdīke Seyyed Esma'īl - Kūcheye Chehel tan

Seyyed Esma'īl のすぐ南。サラーイの一つの中にある一部屋だけの廟。廟の入り口近くは周囲の商店の倉庫のように使われているが、廟を訪れる人は多いとのこと。建築年代、由来などは明らかではない。

ザリーのない、緑の布をかけた墓石をかたどったコンクリートの塊が置かれているだけの部屋。その奥に物置のようになっている小部屋がある。ダヒールやシャムダーンは見られない。

---

[78] Moṣṭafavī, p.15. Sarvqadī, pp.2-21. Mokhtārī Ṭāleqānī, Eskandar, " Emāmzāde Esmā īle Tehrān", *Mīrāthe Jāvīdān*, 28, 1378S.H./1999-2000, pp. 93-102. *Banā-hāye Āramgāhī*, p.137.

[79] その後、2004 年に訪れたときには、文化財保護庁との交渉がうまくいったとのことで、エイヴァーンはアーイーネカーリーになっていた。

[80] Moṣṭafavī, pp. 64-70. Sarvqadī, p.26. Moṣṭafavī は Seyyede Malek-Khātūn との建築上の類似を指摘しているが、その当時の建物は改築によりほぼ原形をとどめていない。*Banā-hāye Āramgāhī*, p.146.

(24) Emāmzāde Ebrahīm (写真 92)

Bazar - Gūd Zanbūrak-khāne - Masjede Shahīd Beheshtī

az Oulāde Emām Reḍā

現在は小路の中のマスジェドの中にあり、管理人は外部にいるため、礼拝の時間以外は鍵がかけられているおり、内部の様子は確認できなかった[81]。

バーザールの商人たちや近所の住人でもエマームザーデの存在そのものや、ズィヤーラトガーがあるらしいことは知っていても名前を知らない人が多い。

(d) シャルギー区 (Sharqī)

(25) Emāmzāde Rūhollāh (写真 93,94,95)

Meidāne Emām Khomeinī - Sākhtmāne Mokhāberāt

Emāmzāde Rūhollāh b. Emām Mūsā

現在は電話局の敷地の中。月曜日だけ参詣者に解放され、ズィヤーラトのために人が訪れる。

一部屋だけのごく最近作られた廟[82]。

金属製のザリーが部屋の中に置かれているが、地下に本当の墓石があるが、明かりがほとんどないため、女性たちはザリーの傍らでコーランを詠んだりドアーを詠んだりしている。

電話局が建設されたときには廟はほとんど壊れていたが、エマームザーデに対する信仰を持つ人たちが電話局に掛け合って廟を再建したとのことだった。

(26) Haft Dokhtarān (写真 96,97,98,99)

Khiyābāne Moṣṭafā Khomeinī - Īstgāhe Tekiye Reḍā-qolī Khān

Haft Dokhtarān Dokhtarāne Emām Mūsā

背の高い細長い廟。建物そのものは新しいもの[83]。

一階部分に金属製のザリー。

地下に下りるハシゴがあり、地下には緑色の布がかけられた墓石。七人姉妹の墓だとのこと。墓石の上に置かれた Gahvāre(ゆりかご)にダヒールが結ばれている。

基本的に木曜日の午後だけ解放しているとのこと。

---

[81] Moṣṭafavī, pp.81-82. Moṣṭafavī はテキエの中にあると記述しているが、現在はマスジェドになっている。また、廟の周辺のアーバンバール、チェナールなどの古木についても記述されているが、現在はすべて取り壊され、切り倒され、住宅となっている。

[82] Sarvqadī, p.23. オリジナルはガージャール朝時代のものと見なされている。(*Pazhūhesh-nāme*, p.47)

[83] *Pazhūhesh-nāme* においてはサファヴィー朝にこの廟が建築されたとされている。(p.51)

(27) Emāmzāde Seyyed Esḥāq (写真 100)

Khiyābāne Nāṣer Khosrou - Kūcheye Khodābandelū

Emāmzāde Seyyed Esḥāq b. Emām Mūsā[84]

レイで殉教したエマームザーデの墓と伝えられている[85]。

最近改修が行われた。三段ほどの階段を上がった廟内には絨毯が敷き詰めてあるだけで、特に何も置かれていない。墓石は地下にあるが、ワクフ慈善庁が入り口に鍵をかけてしまったために、今は入ることはできない。小路から見て半地下になっている部屋が墓石のある場所。これは 8～9/14～15 世紀のものと考えられている。

イラクから避難してきたという未亡人が廟の管理人をしており、土曜日から木曜日の午後からのみ廟を開けている。

(28) Emāmzāde Fāṭeme (写真 101,102)

Khiyābāne Nāṣer Khosrou - Kūcheye Khodābandelū

Emāmzāde Seyyed Esḥāq よりも 200 メートルほど Khiyābāne Nāṣer Khosrou 寄り。

小路が交わった角にあるサッカーハーネ状の小さな廟。

一応、内部には墓石状に作られたものに緑色の布がかけてある。

紙幣が投げ込まれていたり、南京錠がかけられているところから、現在もズィヤーラトに訪れる人がいることは明らかである。

(29) Boq'e Sar Qabr Āqā (写真 103,104)

Chahār-rāhe Moulavī - Ṣāḥeb-Jam

テヘランのエマーム・ジョムエだった Āqā Seyyed Abū al-Qāsem とその家族の墓所。

廟は Nāṣer al-Dīn Shāh 時代のものだが、破損が酷く、現在文化財保護庁により修復中[86]。

(30) Emāmzāde Yaḥyā va Moḥammad (写真 105,106)

Khiyābāne 15 Khordāde Sharqī - Kūcheye Emāmzāde Yaḥyā

Emāmzāde Yaḥyā va Moḥammad az aḥfād Emām Zein al-'Ābedīn[87]

---

[84] Moṣṭafavī, pp.70-71. Sarvqadī, p.19. Moṣṭafavī は、この廟が地元の人に Qadamgāhe Chahārdah Ma'ṣūm と呼ばれているとしている。

[85] Moṣṭafavī, p.70.

[86] *Pazhūhesh-nāme*, p.47. *Banā-hāye Āramgāhī*, pp.282-283.

[87] 一説には Emāmzāde Yaḥyā va Moḥammad b. Zeid b. Emām Ḥasan Mojtabā (Moṣṭafavī, p.15)

古い町並みの中。周囲は小さなバーザール地区となっている。

父の死後、レイ、ゴム、アーモルの神学生の指導者となったが、592/1195-6年に'Alā' al-Dīn Tekesh Khārazmshāh によって殺された。

廟の最も古い部分は八角の塔の部分で、モンゴル時代のものと考えられている。ガージャール朝時代にも改修が行われている。1320S.H./1941 年から大規模な改修が行われた[88]。

近年も廟の内部と外壁の改修を行い、大理石張りとなり、テヘランで最も古い木製のサンドゥーグから金属製のザリーに取り替えられた[89]。

廟の脇に樹齢数百年と言われるチェナールの木があり、市によって保存されている。

(31) Pīr 'Aṭā (写真 107,108)

Khiyābāne 15 Khordāde Sharqī - Bālātar az Chahār-rāhe Moulavī

小さなドームを持つ廟。

廟の管理人によると、文化財保護庁もワクフ慈善庁も廟の価値を認めないため、どちらからも無視され、廟の修理もままならないとのこと。ドームの修理をしたいのだが、お金が上手く集まらないし、どこからも補助が受けられないため、とりあえずの修理しかできないと嘆いていた。

埋葬されている人物についての詳細は不明。

ガージャール朝時代の建築[90]。

(e) ショマーレ・ガルビー区 (Shomāle Gharbī)

(32) Emāmzāde 'Alī ma'rūf be Ma'ṣūm (写真 109,110,111)

Khiyābāne Qazvīn - Sare Pole Emāmzāde Ma'ṣūm

Emāmzāde 'Alī b. Ḥamze b. 'Abdollāh b. Emām Moḥammad Bāqer

廟に隣接してホセイニーエ、シャベスターンを建築中。ザーエルサラーも建設予定。筆者が最初に訪れた 2003 年には、廟内は特に男女の別はなかったのが、2005 年に訪れたときには、廟内が二つに仕切られ、男女が互いの姿を見ることができないようになっていた。

サファヴィー朝時代に建設され、ガージャール朝時代に改修が行われたと考えられている[91]。

---

[88] この時の改修については、Moṣṭafavī, pp.16-22, 35-49 に詳しい。*Banā-hāye Āramgāhī*, pp.219-220.

[89] Moṣṭafavī, p.20. Sarvqadī, p.35.

[90] *Pazhūhesh-nāme*, p.47.

[91] Moṣṭafavī, pp.234-235. Sarvqadī, p.23. Moṣṭafavī は廟の東側を用水が流れていると書いているが、現在は確認できない。*Banā-hāye Āramgāhī*, pp.209-210.

(33) Emāmzāde Ḥasan (写真 112,113)

Khiyābāne Qazvīn - Khiyābāne Amīn al-Molk

(北緯 35 度 39 分 88 秒、東経 51 度 21 分 57 秒、標高 1098 メートル)

Emāmzāde Ḥasan b. Ḥasan Mojtabā

テヘラン西部で最もズィヤーラトに訪れる人がエマームザーデの一つ。以前は周囲をバーザールが取り囲んでいたが、現在は取り壊されて、廟の前を通る Khiyābāne Amīn al-Molk の両側が商店街となっている。

シャベスターンが廟の両脇に作られている大きな廟。この数年、増改築が進められているが、ガージャール朝時代の廟と考えられている。木製のサンドゥーグが置かれていたとのことであるが、現在は金属製のザリーに取り替えられている[92]。

エマーム・ハサンの子供と考えられていることから、エマーム・ハサンの殉教日であるサファル月 28 日にはズィヤーラトのために人が多く集まるとのこと。

(34) Emāmzāde Shāhzāde ‘Abdollāh (写真 114,115)

Khiyābāne 30 Metrīye Jī - Khiyābāne Ḥājiyān

Shāhzāde ‘Abdollāh b. Abū al-Faḍl al-‘Abbās

Emāmzāde Ḥasan の近所。

木々に囲まれた廟で、子供のための遊具も備えられており、人々が散歩がてら訪れる場所になっている。

廟のオリジナルは 7-8/13-4 世紀と考えられているが、現在残る廟はガージャール朝時代に増改築が行われたもの[93]。最近もタイルやアーイーネカーリーなどが加えている。金属製の新しいザリーが置かれているが、六角形という変わった形をしている。敷地内には、図書館、診療所などが備えてある。

以前は Jiye Oliya という村で、廟の周囲はほとんど畑だったとのことだが、現在は住宅などに囲まれている。

(35) Emāmzāde Seyyed Nāser al-Dīn (写真 116,117)

Khiyābāne Khaiyām - Chahār-rāhe Geloubandak

Emāmzāde Seyyed Nāṣer al- Dīn b. Seyyed ‘Abd al-Shā‘er b. Moḥammad al-Faqīh b. Aḥmad b. Seyyed ‘Alī b. Emām Moḥammad Bāqer

現在の廟の敷地よりも広い敷地を持っていたが、道路の拡張工事のために

---

[92] Moṣṭafavī, pp.196-202. Sarvqadī, p.23. *Banā-hāye Āramgāhī*, p.113.
[93] Moṣṭafavī, pp.202-204. Sarvqadī, p.27. *Banā-hāye Āramgāhī*, pp.183-184.

敷地が少し削られてしまったとのこと。この時、Ṣaḥn にあった古木も切り倒されてしまった。

オリジナルの廟は 9/15 世紀頃の建築と考えられるが、現在残る廟はガージャール朝時代のものと考えられている[94]。近年も改修が行われ、アーイーネカーリーなどが加えられた。

993/1585 年という年代の見られるザリーが置かれていたとされているが、現在は新しい金属のザリーとなっている。

(36) Boq'e Sheikh 'Abdollāh (写真 118,119)

Pārke Ṭarasht

イスラーム時代初期の有名なウラマーの墓。

以前は Ṭarasht 村の外れだったが、現在は公園の一角になっている。

廟内にある墓石などから、サファヴィー朝初期の建築と考えられる[95]。ザリーは金属製の新しいものが置かれている。

近年、文化財保護庁により改修が行われ、廟内にアーイーネカーリーによる装飾が行われた。

(f) キャン区 (Kan)

テヘラン北西部にある以前のキャン村とその周辺部の地区(現在のテヘラン市第五区)と、キャン渓谷沿いのソウレガーン(ソウレグーンと呼ばれることも多い)に点在する村々を総称してキャンと呼んでいた。

山裾に広がるキャン村とキャン渓谷沿いの村々は、標高の高さ故に夏涼しく冬は非常に寒いという気候を持ち、キャン川や泉を中心とする水資源に恵まれ、農業と牧畜が主たる産業。特にトゥート(桑の実)、シャートゥート(黒桑)、ギーラース(桜桃)など、各種の果実で名高い。

現在、テヘラン第五区は、増え続けるテヘランの人口を受け入れる住宅地として、宅地開発が急速に進んでいる地区の一つとなっている。また、キャン渓谷沿いの村々には、テヘラン市の人々のためのヴィラ建設が急速に進んでいる。

(37) Ein-'Alī va Zein-'Alī (写真 120,121)

Otobāne Sharqīye Eṣfahāni - Pūnak

Emāmzādegān 'Ein-'Alī va Zein-'Alī abnā Emām Zein al-'Ābedīn

---

[94] Moṣṭafavī, p.64. Sarvqadī, p.34. *Banā-hāye Āramgāhī*, p.146.

[95] Moṣṭafavī, pp.204-205. Sarvqadī, p.28. Moṣṭafavīはシャー・タフマースプの時代の可能性が高いとしている。*Banā-hāye Āramgāhī*, p.304.

周囲をバーグに取り囲まれた Pūnak のはずれにある。

ファラヘザードから流れてきた川が廟の西側の谷を流れている。

敷地内にはチェナールの大木が立ち並び、水路が走っている。

敷地内には墓地も見られるが、現在は埋葬を行っていないとのこと。

廟はガージャール朝時代のものとされるが[96]、1381S.H./2002 年に改修が行われ、事務所、台所をはじめとする施設が加えられた。

春から夏にかけては、週末になるとピクニックを兼ねた家族連れで一杯になるとのこと。

(38) Emāmzādegān Ja'far va Ḥamide Khātūn (写真 122,123,124,125)

Pūnak – Bolvāle Āyatollāh Ashrafī Esfahānī - Bāghe Feiḍ

Emāmzādegān Ja'far va Ḥamide Khātūn az navādegān Emām Mūsā b. Ja'far

墓地の中。周囲をバーグが取り囲んでいる。

廟の前にはチェナールの巨木。廟の下を流れるガナートの水が墓地を通ってバーグへと流れ出ている。

廟は近年改築された新しいもので（1370S.H./1991）[97]、入り口を入ってすぐ金属製のザリーが二つ置かれている。右手が Emāmzāde Ja'far、左手が、Emāmzāde Ḥamide Khātūn。オリジナルはガージャール朝時代に建てられたものであっただろうとされている[98]。

ザリーの奥はシャヒードの肖像画とアーイーネカーリー、シャンデリアが飾られたホセイニーエとなっている。

(39) Emāmzāde 'Alī b. Ja'far ma'rūf be Emāmzāde Ja'far (写真 126,127)

Kan – Maḥalle sare Āsiyāb

Emāmzāde 'Alī b. Ja'far b. Emām Mūsā b. Ja'far[99]

キャンの中心部近く。墓地の中。廟の正面は住宅や商店が軒を連ねる旧キャン村の中心部。

古い廟を取り壊し、新しい廟が立てられている。ザリーも金属製の新しいものが置かれ、廟内はアーイーネカーリーとタイルで飾られている。

ハラムを取り囲むようにナマーズのための空間が設けられている。

(40) Emāmzāde Seyyed Moḥammad Reḍā[100] (写真 128,129)

---

[96] Moṣṭafavī, pp.210-211. *Pazhūhesh-nāme*, p.47. Sarvqadī, p.152.
[97] Sarvqadī, p.145.
[98] *Dāyerat al-Ma'ārefe Zane Īrānī*, jelde avval, pp.117-118.
[99] Sarvqadī, p.151.
[100] Sarvqadī, p.148.

Kan – Maḥalle Miyāne deh

キャンの外れの墓地の中。後背にはバーグが広がっている。

廟の傍らにはチェナールの巨木。

木曜日の午後のみ扉を開けるとのこと。

建物は最近改修された。墓石はガラス張りのザリーの中に収まっている。

血統ははっきりしないが、ある村人が見た夢の中ではエマーム・ジャアファルの孫と名乗っていたと伝えられている。

(41) Emāmzāde Kābol Ḥosein (写真 130,131)

Kan – Maḥalle Dār-qāẓī

Emāmzādegān Ḥosein va Abū al-Hosein az Emām Zein al-'Ābedīn

キャンで殉教した二人のエマームザーデが葬られていると言われているが、名前に関しては Kābol と Ḥosein という人物であるという説と、Ḥosein と Abū al-Hosein の二人であるという説がある[101]。

現在はマスジェドの中の一部屋となっている。

ザリーはなく、大理石の新しく大きな墓石がそのまま置かれている[102]。

図書館をはじめとするマスジェドに付属する施設も多く、それを利用するために訪れる人も多くズィヤーラトを行っていくとのこと。

(42) Emāmzāde Moḥammad (写真 132)

Kan - Entehāye Āsiyāb

村の住宅からは少し離れた墓地の中の廟。墓地の周囲はバーグに取り囲まれている[103]。

新しい金属のザリーが置かれているハラムだけの建物。建物そのものはそれほど古いものではない。

(43) Emāmzāde Sho'eib (写真 133,134,135,136)

Kan – Maḥalle Bāghāt

Emāmzāde Sho'eib b. Emām Mūsā b. Ja'far

バーグに囲まれた廟。廟の起源はサファヴィー朝時代の建築に遡ると考えられている[104]。

廟の傍らに大きなチェナールの木が生えており、この木に面した廟の窓に

---

[101] Sarvqadī, p.153.

[102] マスジェドの敷地の中の一角には、現在の廟が建設される前に使われていた古い木のサンドゥーグが置かれている。

[103] Sarvqadī, p.153. 周囲のバーグの一部はエマームザーデのワクフとのこと。

[104] Sarvqadī, p.149.

はシャムダーンが設けられ、窓の外に設けられた柵にダヒールが沢山結びつけられている。

2001年には木製の古いザリーが置かれていたが、2002年に再度訪れたときには新しい金属製のザリーに変わっていた。

近隣の人々の信仰を集めており、寄付も多いとのことであった。

(44) Boq'e Seyyed Aḥmad ma'rūf be Darbe Seyyed (写真 137,138)

Entehāye Souleqān

ソウレガーンの外れにある小さな廟。街道を挟んでソウレガーンを見下ろす小高い場所。

廟は最近改修された一部屋だけの小さなものだが、現在の金属製のザリーに取り替えられる前の古い木のサンドゥーグには、966/1558-9年の日付が入っていた[105]。

廟の前には小さな墓地があるが、村の公共墓地は他の場所にある。

普段は鍵がかけられており、基本的に木曜日に開けるとのこと。

(45) Boq'e Amīr Seyyed Moḥammad ma'rūf be Nūr-bakhsh (写真 139,140)

Souleqān Maḥalle Vasaṭ

エマーム・ムーサーから17代目の子孫と言われている。869/1464-5年没[106]。

パキスタンから多くの弟子と共にこの地へやって来たセイエドで、この地で亡くなり、葬られた。現在の村の外れ。

現在でもセイエドに従う人々がパキスタンなどから多くの寄進を行っており、それによって廟の改築と、街道から村へ降りる道を舗装したりしているとのこと。

廟の中はタイルとアーイーネカーリーで飾られ、低い木の柵で囲まれたセイエドの墓がハラムの中心に置かれている。ハラムの片隅にはセイエドに従っていた弟子の一人の小さなザリーに納められた墓。

増改築が進められており、ハラムの隣にシャベスターンが作られ、ゴルダステが建てられている。街道から見下ろすと、廟の青いタイルのドームとゴルダステの金色がよく見える。

(46) Emāmzāde Maḥmūd (写真 141,142,143,144)

Jādde Souleqān – Rūstāye Keshāre Pāīn

街道の真下。村の一番奥。

---

[105] Sarvqadī, p.148.
[106] Sarvqadī, p.148.

チェナールの巨木。直径二メートルほどだが、中はうつろになっている。特に墓のようなものは見あたらない。

チェナールの脇に大きな岩があり、その下から水がわき出ている。水の湧き出し口には小さな囲いが作られ、この囲いの柵にダヒールが多く結ばれている。この水を汲みに多くの人がやって来るという。

このチェナールと泉を合わせてエマームザーデ・マフムードと呼ばれている。

(47) Emāmzāde Javvār (写真 145,146,147)

Jādde Souleqān – Rūstāye Keshāre Bālā

村の奥。チェナールとトゥートの木に挟まれた一に小さな廟があったと伝えられている。

現在は盗掘の影響で建物は完全に崩れてしまい、煉瓦が少し残るのみになっている。それでも人は訪れているらしく、チェナールの木の方にはまだ新しいダヒールが結ばれている。

盗掘が行われた時期についてははっきりしなかった。

(48) Emāmzāde Ebrāhīm (写真 148,149)

Jādde Souleqān – Rūstāye Keshāre Bālā

チェナールに囲まれた丘の上。

細長い建物の奥。その奥にはゴスル台？

現在は干上がっているが、以前は廟の脇を小川が流れていたらしい。

落ち葉やゴミが積もり、人が訪れている様子はほとんど見られない。

(49) Emāmzāde Qāsem (写真 150,151,152,153)

Rūstāye Sangāne Bālā

Emāmzāde Qāsem b. Emād al-Dīn b. Ja'far b. Nūḥ b. 'Aqīl b. Emām Zein al-'ĀbeDīn

村からは徒歩でしか通えない谷沿いの細い道の奥。

大きなチェナールの木の陰にある廟。廟の裏手のすぐ下を川が流れている。

廟は最近改修が行われた。[107]

金属製のザリーが壁に一面を接して置かれている。このザリーにはダヒールが結べないので、手前に置かれている木の台の足にダヒールが沢山結びつけられている。

夏でも涼しく、緑と水が豊かな場所であるため、春から夏にかけてはテヘ

[107] Sarvqadī, p.152.

ランからも多くの人がやって来るとのこと。

現在ハーデメを努めている女性は、やはりハーダムだった父親の後を継いでこの仕事をしているとのこと。子供たちはすべてテヘランに移り住んでしまっているので、自分の後は誰がこの仕事をするのか分からないと話していた。

(50) Emāmzāde Emād al-Dīn[108] (写真 154,155)

Rūstāye Sangāne Vasaṭ

Emāmzāde Emād al-Dīn b. Ja'far b. Nūḥ b. 'Aqīl b. Hādī b. Emām Zein al-'Ābedīn

村はずれの小高い丘の上に立つ廟。周囲を墓地に囲まれている。

近年改修され、ザリーも金属のものに取り替えられた。

村の人によると、隣村の Emāmzāde Qāsem はこの Emāmzāde Emād al-Dīn の子供だということなのだが、双方の廟内にあるシャジャレ・ナーメは実際には一致しない。

(51) Emāmzāde 'Alā al-Dīn (写真 156,157,158)

Rūstāye Sangāne Pāīn

Emāmzāde'Alā al-Dīn b. Ja'far b. Nūḥ b. 'Aqīl b. Hādī b. Emām Zein al-'Ābedīn

エマームザーデ・ダーヴードへの街道から入って来た場合、村の入り口に当たる場所。街道からは少し下った場所。廟から更に下がった場所は村のバーグが広がる。その一部はエマームザーデに対するワクフであるとのこと[109]。

部屋が一つあるだけの小さな廟。2002 年には墓石だけであったが、2004 年訪れたときにはザリーが置かれていた。ガージャール朝時代の建築と考えられている[110]。

隣村の Emāmzāde Emād al-Dīn とは兄弟にあたる。

(52) Emāmzāde 'Aqīl (写真 159,160)

Jādde Sangāne – Shomāle Sangān

Emāmzāde 'Aqīl b. Hādī b. Emām Zein al-'Ābedīn

Emāmzāde Dāvūd 街道から三つのサンガーン村へ向かう枝道を、下サンガーン村の手前で山に向かって伸びる未舗装道路の突き当たり。

小さな部屋が二つあるだけの廟。

古い木のザリーから近年金属のザリーに取り替えられた。古いザリーは物置となっている部屋の天井に置かれている。

---

[108] Sarvqadī, p.151.
[109] Sarvqadī, p.151.
[110] *Pazhūhesh-nāme*, p.47.

テヘランや村からは離れた場所にあるが、テヘラン市内のバーザール商人などの信仰を集めており、エマームザーデのシャファーにより病気が治ったというバーザール商人が寄付金を送ってきたので、それによって廟の修理や設備の整備を行う予定だとのことだった。

下サンガーン村と中サンガーン村の Emāmzāde Emād al-Dīn と Emāmzāde ʻAlā al-Dīn の曾祖父に当たる。

(53) Emāmzāde Dāvūd (写真 161,162)

Entehāye Jādde Sangān Rūstāye Kīgā

Emāmzāde Dāvūd b. Emād al-Dīn b. Jaʻfar b. Nūḥ b. ʻAqīl b. Hādī b. Emām Zein al-ʻĀbedīn[111]

上サンガーン村の Emāmzāde Qāsem とは兄弟に当たる。

キャン渓谷の突き当たりであるこの地で、アッバース朝軍に追われてきたエマームザーデ・ダーヴードは殺され、埋葬されたと伝えられている。

テヘランでもズィヤーラトに訪れる人が最も多い聖所の一つ。テヘラン州内外からだけでなく、国外からも人が訪れているとのことである[112]。

以前、洪水によって廟が流されたが、エマームザーデ・ダーヴードの墓石だけは洪水が避けて通ったために無事だったということが、エマームザーデの奇跡譚として伝えられている。現在、この墓石は廟の地下にあり、基本的に、許可を得た人以外は触れることはできないようになっている。墓石の上階にはザリーが据えられ、その中に墓石状の石が置かれている。

廟内には、エマームザーデ・ダーヴードに付き従い、共に殺された奴隷のターヘルのザリーも置かれている。また、地下へ通じる階段の入り口もザリー状の柵に覆われ、そこにも人々はエマームザーデ・ダーヴードのザリーと同じように触れ、寄進のお金を投げ込んでいる。

以前は、ターヘルのザリーのある小部屋でコインやモフルによる占いが行われていたが、現在は禁止されている。

---

[111] Moṣṭafavī, pp.215-223. *Badāyi ʻal-Ansāb* を著した Sayyid Mahdī Tafreshī Badāyi ʻ や Āyatollāh Najafī Marʻashī の説によると、Emām Ḥasan Mojtabā に遡るとのことである。*Badāyi ʻal-Ansāb* では、Emāmzāde Dāvūd b. Emād al-Dīn b. Jaʻfar b. Nūḥ b. ʻAqīl b. Hādī b.Yaḥyā b. Qāsem b. Ebrāhīm Ṭabāṭabāī b. Esmāʻīl b. Ḥasan Mothannā b. Emām Ḥasan Mojtabā となり、Āyatollāh Najafī Marʻashī は、Sharaf al-Dīn Dāvūd b. Emād al-Dīn b. Jaʻfar b. Nūḥ b. al-Ḥasan al-Gheilī al-Yamānī b. Abī al-Ḥasan Yaḥyā al-Hādī Elā Allāh b. Abī ʻAbdollāh al-Ḥosein al-Javād b. Qāsem al-Rasī Tarjomān al-Dīn b. Ebrāhīm Ṭabāṭabāī b. Esmāʻīl al-Dībāj b. Ebrāhīm al-Ghamar b. Abī Mohammad al-Ḥasan Mothannā b. al-Emām Ḥasan Mojtabā とのことである。(Sarvqadī, pp. 146-147. Kūshā, Moḥammad ʻAlī , *Zendegī va Partouī az Kalāmāte Emāmzāde Dāvūd (440-480) be Ḍamīmeye Ziyārat-nāme*, Qom, 1379S.H./2000, pp. 35-27.)

現在は、このエマーム・ハサンに遡る血統を採ることが多いようであるが、現地では、エマーム・ゼイノルアーベディーンに遡り、近隣のエマームザーデたちと血縁関係にあることを示す血統の方を信じる人も多い。

[112] 清水直美、「エマームザーデ・ダーヴードのゴバールービー」を参照のこと。

現在の廟はイスラーム革命後に増改築が行われたものであるが、洪水前の建物には、ガージャール朝の王族や貴族たちの名前の入った寄進財が多く見られたという。

残された文献などから、廟はサファヴィー朝時代シャー・タフマースプの時代まで遡ることができると考えられている[113]。

廟の周囲にはバーザール、巡礼宿が広がり、廟内にも巡礼宿、診療所、図書館、エマームザーデ事務局などが設けられている。冬はこれらの多くが閉鎖されるが、除雪車が導入された近年は、冬期でも巡礼者が多く訪れるという。

(g) シャフレ・レイ区 (Shahre Rey)

テヘラン市の南部に広がる郡。アルボルズ山脈から地下を通ってきた水が地表に現れる場所であり、その水により古くから栄えた。また、イランの東西、南北を結ぶ街道の交わる場所であり、先史時代からの遺跡が数多く見られる。イスラーム以後もレイは、イラン国内の四つの大きな町（ケルマーンシャー、ハマダーン、エスファハーン、レイ）の一つとしてアラブ人の地理書などにも名前が見られる町であった。レイ出身の著名な学者も多く、ガージャール朝時代にテヘランが都とされるまで、アルボルズ南麓における学問や宗教の中心の一つとして栄えた。

シャフレ・レイ南部の Kūhe Bībī Shahr Bānū と、ゴム州に近い Gardane Ḥasan ābad の他はほぼ平坦な土地が広がり、いくつかの川とガナートにより引かれた水、地下水によって、野菜や小麦をはじめとする農業やその傍らで牧畜が行われてきた。現在は、大小さまざまな工場が作られ、そうした工場で働く人も多い。

近年、イラン各地から職を求めてテヘランに移動してきた人々や農作業に従事するアフガン人労働者がシャフレ・レイやその周辺の村に住みつき、もともとの住民はテヘランに移動するという状態が見られる。

行政区分としてはマルキャズィー（Markazī=シャフレ・レイ）、キャフリーザク(Kahrīzak)、ファシャープーイェ(Fashāpūye)に分けられるが、本論では、ワクフ慈善庁による管理区分である、シャフレ・レイ(マルキャズィーとキャフリーザク)とハサナーバード(ファシャープーイェ)に分ける。

シャフレ・レイの聖所

(54) Emāmzāde ‘Abdollāh (写真 163)

Shahre Rey – Se-rāhe Varāmīn

(北緯 35 度 35 分 78 秒、東経 51 度 26 分 26 秒、標高 1088 メートル)

---

[113] Moṣṭafavī, p.216-219. *Banā-hāye Āramgāhī*, pp.117-118.

Emāmzāde Abū ‘Abdollāh Ḥosein b. ‘Abdollāh b. ‘Abbās b. Moḥammad b. ‘Abdollāh b. Ḥasan b. ‘Alī b. ‘Alī b. al-Ḥosein[114]

ゴムからレイへと移り住み、219/834 年に亡くなったと伝えられる。

周囲には古い墓地が広がっている。

ヴァラーミーンへの街道口。

ガージャール朝時代の建築が基本となっているが、オリジナルはサファヴィー朝時代の建築に遡ると考えられている[115]。

1378S.H./1999 年に改修が行われ、アーイーネカーリーで飾られたハラムや、金属製のザリーに変わっている。

(55) Sheikh Ṣadūq (写真 164)

Shahre Rey – Se-rāhe Varāmīn – Gabrestāne Ebne Bābūye

Abū Ja‘far Moḥammad b. ‘Alī b. Ḥosein b. Mūsā b. Bābūye Qommī Ma‘rūf be Sheikh Ṣadūq

311~381/991-2~923-4 年

ガージャール朝時代ファトフ・アリー・シャーの時代の建築がもとになっているが、近年改修が行われている[116]。

シェイフが亡くなった後、この場所に葬られたがその後の歴史の中で墓は忘れ去られていた。しかし、ナーセロッディーンシャーの時代にその遺体が生きているかのような状態で発見され、そこに廟が作られた。

廟の周囲はシャフレ・レイの墓地。この廟はそのほぼ中央に位置し、墓地の東端に Emāmzāde Hādī がある。著名人もここには多く葬られており、レスリングのタフティーや、辞書編纂で有名なデホダーの墓もここにある。

(56) Emāmzāde Hādī (写真 165,166)

Shahre Rey – Se-rāhe Varāmīn - Gabrestāne Ebne Bābūye

(北緯 35 度 36 分 34 秒、東経 51 度 26 分 72 秒、標高 1097 メートル)

Emāmzāde Hādī b. Sarāvīn b. Emām Mūsā b. Ja‘far

シェイフ・サドゥーグと同じ墓地の中。テヘラン街道の傍にあたる。

姉妹にあたる Emāmzāde Zeinab と一緒に葬られている。

オリジナルの廟はサファヴィー朝のシャー・タフマースプの時代に遡るが、現在の建物はガージャール朝のナーセロッディーンシャーの時代に増改築されたものが基本となっている[117]。

---

[114] *Banā-hāye Āramgāhī*, p.186.

[115] Moṣṭafavī, pp. 162-163. Sarvqadī, p.108. *Banā-hāye Āramgāhī*, p.186.

[116] Moṣṭafavī, p.243. Sarvqadī, p. 106. *Banā-hāye Āramgāhī*, p.252.

[117] Moṣṭafavī, pp.162-165. Sarvqadī, p. 111. *Pazhūhesh-nāme* においてはティームール朝時代に遡る可能性も

ハラムの奥はマスジェドとなっており、以前はこのマスジェドの名前(Māshā-allāh)の方が良く知られていたとのこと。

2003 年にはザリーはなく、緑の布がかけられた墓石がそのまま置かれていたが、2007 年に訪れたときには金属製のザリーが設置されていた。

(57) Se Dokhtarān (写真 167,168)

Shahre Rey – Bolvāre Āvīj

Se Dokhtarān Banāt Emām Mūsā b. Ja'far (Ṣoghrā, Kobrā va Khadīje)

三姉妹の廟。名前は、Kobrā、Ṣoghrā、Khadīje であると言われている。

以前は墓地に囲まれていたが[118]、現在は土を入れて公園になっている。

緑の布がかけられた墓石があるだけの小さな廟であるが、火曜日の夜になると女性たちが多く集まってくる。

廟の建築年代はサファヴィー朝時代に遡ると考えられているが、近年改修が行われている[119]。また、2003 年に管理人から聞いた話によると、すぐ隣にある Emāmzādegān Qāsem va 'Alī と一緒に大きな廟を建築する予定とのこと。[120]

(58) Emāmzādegān Qāsem va 'Alī (写真 161、162)

Shahre Rey – Rū-be-rūye Sharqīye Ḥarame Moṭahhar

Emāmzādegān Qāsem va 'Alī b. Zeid b. Emām Ḥasan Mojtabā[121]

Se Dokhtarān のすぐ近くであるが、血縁関係はない。廟は Se Dokhtarān と同時期に建築・改修が行われたと考えられている。

二つ並んだザリーを持たない墓石で一杯になってしまう小さな廟。

(59) Emāmzāde Bībī Zobeide (写真 171,172)

Shahre Rey – Khiyābāne Fadāyiyāne Eslām

(北緯 35 度 36 分 33 秒、東経 51 度 26 分 22 秒、標高 1096 メートル)

Emāmzāde Bībī Zobeide bent Bībī Shahr Bānū[122]

墓地の中。

指摘されている。(p.214) *Banā-hāye Āramgāhī*, p.215.

[118] *Khātūne Haft Qal'e*, p.173.

[119] Sarvqadī, p. 105. *Dāyerat al-Ma'ārefe Zane Īrānī*, jelde avval, pp.123-124.

[120] 2007 年に訪れた際には、二つの廟それぞれに改修が行われた様子は見られたが、二つの廟を取り壊して大きな廟を作る準備が行われているような様子は見られなかった。

[121] Sarvqadī, p. 104. これによると、Emāmzādegān 'Īsā va 'Alī であるが、ワクフ慈善庁のリストと廟における表記はこのようになっている。*Pazhūhesh-nāme* においてもこの表記であるので(p.215)、Savaqadī の誤りである可能性がある。*Banā-hāye Āramgāhī*, p.258.

[122] Sarvqadī, p. 102. 一説には、Bībī Shahr Bānū の娘の名前は Sakīne と Fāteme であり、Bībī Zobeide は Fāteme の称号である。また、廟内の碑文には、シェミラーンのエマームザーデ・ガーセムと推測されている Qāsem Thānī の母がこのゾベイデ・ハートゥーンであると書かれている。(Moṣṭafavī, p.244.) *Dāyerat al-Ma'ārefe Zane Īrānī*, jelde avval, p.191.

シーア派四代目イマームの母であるビービー・シャフルバーヌーの娘と信じられている。

現在改修中。廟の最も古い部分は、9/15 世紀のものと考えられているが、大部分はガージャール朝初期のもの[123]。

内部はガージャール朝時代の絵画や漆喰のムカルナスで飾られている。

(60) Seyyed Esmā'īl va Seyyed Ebrāhīm (写真 173,174)

Shahre Rey – Qal'e Doulat ābād

Seyyed Esmā'īl va Seyyed Ebrāhīm az navādegāne Emām Mūsā b. Ja'far[124]

二本の小路に面しており、双方に入り口があるがごく小さなものなので、近隣の人にも廟の存在を知らない人がいる。

ホセイニーエを兼ねており、平日は女性たちが廟に集まっていることが多いため、男性が中に入るときには一声かけてから入らなくてはならないとのこと。

建物は新しいもので、小路から見た限りは周辺の住宅とほとんど変わらない。そのため、通りを二三本離れると、この廟の存在を知らない人も多い。

(61) Emāmzāde 'Alī ma'rūf be Abū al-Ḥasan (写真 175,176,177)

Shahre Rey – Rūstāye Andarmān

(北緯 35 度 35 分 76 秒、東経 51 度 34 分 41 秒、標高 1075 メートル)

Emāmzāde 'Alī b. Ḥosein b. 'Īsā b. Moḥammad b. 'Alī al-'Arīḍ b. Ja'far al-Ṣādeq

周囲をバーグや畑、水路に囲まれた廟。

非常に美しい木製のザリーが置かれている[125]。

現在も改修やゴルダステの建築が進められているが、廟の建築はガージャール朝時代に遡ると考えられている[126]。

シャフレ・レイ南部では最も人々の信仰を集めているエマームザーデの一つとのことで、常に、バラキャトを得ようとする人がザリーの傍らに座ったり横たわったりしている。

(62) Emāmzāde Ebrāhīm (写真 178)

Shahre Rey – Rūstāye Andarmān – na-rasīde be Ṣāleḥ ābād

---

[123] Moṣṭafavī, pp. 243-245.

[124] Sarvqadī, p. 97.

[125] Moṣṭafavī はこのザリーをテヘランで最高のガージャール朝時代のザリーと評価している。(pp.165-167)

[126] Moṣṭafavī, pp.165-167. Moṣṭafavī は Emāmzāde 'Abdollāh との建築上の類似を指摘し、同一人物によるものではないかと推測している。Sarvqadī は、入り口の扉の碑文について、セルジューク朝のものであるとしている。(p 999) *Banā-hāye Āramgāhī*, p.94.

(北緯 35 度 35 分 92 秒、東経 51 度 23 分 76 秒、標高 1090 メートル)

Emāmzāde Ebrāhīm az Navādegāne Emām Mūsā b. Ja'far[127]

エマームザーデ・アボルハサンから約 1 キロメートルほどの近距離。畑に囲まれた中の廟。

廟はそれほど古いものではなく、近年も改修が行われている。ハラムはザリーの置かれたごく小さな空間。

(63) Javān-marde Qaṣṣāb (写真 179)

Shahre Rey - Bozorgrāhe Shahīd Rajā'ī - Se Rāhe 'Alī ābād

圧制者に立ち向かった勇者であると伝えられているが、どのような人物だったかははっきりと分からない[128]。しかし、ズィヤーラトガーとして近隣の人々のズィヤーラトの対象となっている。現在は木曜日の午後のみ扉が開けられている。

ガージャール朝のファトフアリー・シャーの時代に建設されたとされるが、現在の廟は近年に建て替えられたもの[129]。

(64) Emāmzāde Abū al-Qāsem (写真 180,181)

Shahre Rey – Sa'īd ābāde Pāīn

Emāmzāde Abū al-Qāsem b. Emām Mūsā b. Ja'far

ホメイニー廟の近くの畑の中。村からは少し離れている。

廟の周囲には村の墓地が広がる。

建物は近年改修されたもの。[130] その改修の際、ホセイニーエが廟の隣に作られたとのこと。

(65) Emāmzāde Zeid (写真 182,183)

na-rasīde be Pāsgāhe Ne'mat ābād

Emāmzāde Zeid b. 'Alī b. 'Īsā b. Yaḥyā b. Ḥosein b. Zeid b. Emām Zein al-'Ābedīn

非常に大きな敷地を持つ墓地の中。

廟は大規模に改築が行われ、以前のものは残っていない[131]。

---

[127] Sarvqadī, .696.

[128] Moṣṭafvī は、全国どこにでも見られる名前であるので、人物の特定に関しては廟の研究と分けて考える必要があるとしている。(pp.168-169)

[129] Sarvqadī, p.99. *Pazhūhesh-nāme* においては、ブワイフ朝時代の建築であると指摘されている。(p.215.) *Banā-hāye Āramgāhī*, p.268.

[130] Sarvqadī, p.100. *Pazhūhesh-nāme* においてはセルジューク時代の様式であると指摘されているが、建築年代については明確にしていない。(p.212)

[131] Sarvqadī, p.104.

(66) Emāmzāde Gheibī (写真 184,185)

Jādde Varāmīn - Rūstāye Dehe Kheir

革命前のある時、地主がエマームザーデを取り壊し、バーグにしてしまった。村人は裁判所やワクフ慈善庁などに訴えたが、結局、私有地内でのことだったために取り壊しを止めることができなかったとのことで、現在は、エマームザーデは全く残っていない。

現在は、エマームザーデの跡地に隣接した家の塀を訪れ、そこにろうそくを灯したりしている。

跡地であるバーグの持ち主は、中に入ることに対する許可を与えてくれなかったため、そちら側の様子は確認できなかった。

(67) Emāmzāde Sho'eib (写真 186)

Jādde Varāmīn – Rūstāye Fīrūz ābād

(北緯 35 度 34 分 98 秒、東経 51 度 26 分 42 秒、標高 1023 メートル)

Emāmzāde Sho'eib b. Emām Mūsā b Ja'far

村はずれの墓地の中。

古い建物はいたみが激しく、3～4 年前から改修が始まっている[132]。

近隣の人々のエマームザーデに対する信仰心は強く、毎木曜日の午後は墓参をかねて訪れる人であふれる。

(68) Emāmzāde Gheibī (写真 187,188)

Jādde Varāmīn – Rūstāye Gol Tappe Kabīr

(北緯 35 度 29 分 27 秒、東経 51 度 33 分 91 秒、標高 1020 メートル)

二人の兄弟と言われているが、血統などは明らかではない。

ホラーサーン街道と、レイ-ヴァラーミーン街道を結ぶ道沿いにある村の中。街道からは民家を隔てた奥にあるので直接目にすることはできない。

以前は建物があったとのことであるが、現在は金属の柵に囲われた二つの墓石が並んでいるのみ[133]。

近隣の人々は大きなバラキャトを持つこのエマームザーデに信仰を持っており、しばしば願い事が叶ったとナズリーがここで配られているとのことであった。

---

[132] Sarvqadī, p.106.

[133] *Pazhūhesh-nāme* には煉瓦で作られたガージャール朝時代の建物があると述べられている。(p.210) この建物が失われた時代は近所の人々に聞いてもはっきりしなかったが、この 10 年ほどのことであるらしい。

(69) Emāmzāde Ya'qūb (写真 189,190)

Jādde Varāmīn – Rūstāye 'Abbās ābād

(北緯 35 度 31 分 03 秒、東経 51 度 35 分 04 秒、標高 1007 メートル)

Emāmzāde Ya'qūb az Navādegāne Emām Zein al-'Ābedīn

村から少し離れた畑の中。周囲は村の墓地になっている。

以前の廟は取り壊し、新しく廟を建築中[134]。

現在、周囲の村の住人はアフガン人が多くなっており、ズィヤーラトの人もアフガン人が多い。

(70) Emāmzādegān 'Abdollāh va Esma'īl (写真 191,192,193)

Jādde Varāmīn – Rūstāye Shams ābād

Emāmzādegān 'Abdollāh va Esma'īl az Navādegāne Emām Ja'far

もともとガルエ(城塞)として築かれた村。現在、住人はほとんどいない。

以前の廟を取り壊し、新しく廟を建築中であるが、2003 年現在、工事は完全に止まっており、屋根もかけられていないままであった[135]。

入り口を入ると作りかけの部屋があり、その奥に同じように作りかけのもう一部屋もうけられている。緑の布をかけた墓石らしきものがそれぞれ一つずつ置かれている。手前の部屋がアブドッラー、奥がエスマーイールとのこと。

(71) Emāmzādegān Ebrāhīm va Esma'īl ma'rūf be Qal'e Sheikh (写真 194,195)

Kahrīzak – Qal'e Sheikh

Emāmzādegān Ebrāhīm va Esma'īl b. Emām Mūsā b. Ja'far

村からは離れた畑の中の廟。周囲は墓地。現在は埋葬は禁じられている。

周囲から少しだけ高くなった場所に建てられている。

はじめは一部屋だけのごく小さな廟だったが、それを取り壊し、ドームを持つ大きな廟に建て替えた。2002 年に完成[136]。

周辺の村だけではなく、テヘラン市内などからもズィヤーラトの人々が訪れるという。

(72) Emāmzāde Qāsem[137] (写真 196,197,198,199,200)

Kahrīzak – Dehe Touhe Oliyā

(北緯 35 度 27 分 8 秒、東経 51 度 24 分 12 秒、標高 983 メートル)

---

[134] Sarvqadī, p.111.

[135] Sarvqadī, p.107. これによると 2005 年当時も工事が止まったままである。

[136] Sarvqadī, p.97.

[137] *Pazhūhesh-nāme* によると、Seyyed Abū al-Qāsem va Seyyed Esma'īl となっているが、村の人や周辺の住民もみな Emāmzāde Qāsem と呼んでいる。(p.211)

住民がほとんどいなくなってしまっている村の中。村の周辺には牛や羊の大規模牧場が多い。この村の住人が持つ土地を事業目的でテヘランから買いに訪れる人が増えているとのこと。

廟の道路を挟んだ向かい側にマスジェドとハンマーム。

村の住民は少なくなっているとのことであるが、掃除が行き届き、内部の装飾も新しいものが多い。子授け祈願のダヒールも見られる。

建築年代は、ガージャール朝時代末期と見なされている[138]。

(73) Se Barādarān (写真 201,202,203,204)

Rūstāye Khor'ein

村から少し離れた場所にある廟。小川のほとり。

二つ並ぶドームの下に緑の布をかけた二つの墓石。ドームの前、入り口を入ってすぐの屋根のない場所にも布をかけた墓石が一つ。

血統を示すズィヤーラト・ナーメなどは廟内には見られない。

入り口部分などに修理の跡は見られるが、古い形を残している。

周囲は工場などが多い。人はよく訪れているらしく、新しいろうそくの跡などが沢山残っている。

セルジューク時代の建築と考えられている[139]。

(74) Emāmzāde Roqaiye (写真 205,206,207)

Kahrīzak – Rūstāye Tabā'īn

Emāmzāde Roqaiye b. Emām Mūsā b. Ja'far

Qal'e Sheikh の Emāmzādegān Ebrāhīm va Esma'īl の姉妹。

村の中。奥行きのある廟。

廟の奥にあるハラムは、小さな部屋の中に周囲を回るのが精一杯なほど大きな墓石が置かれている[140]。

廟の前に柵が置かれており、ここにダヒールが多く結ばれていた。

村の女性たちが多く訪れるとのこと。

ガージャール朝時代末期の建築と見なされている[141]。

(75) Emāmzāde 'Alī Akbar (写真 208)

Shahre Rey – Rūstāye Pelā'īn

---

[138] *Pazhūhesh-nāme*, p.211.
[139] *Pazhūhesh-nāme*, p.212.
[140] Sarvqadī, p.104. 筆者が 2003 年に訪れたときには緑の布がかけられた墓石がそのまま置かれていたが、その直後にザリーが置かれたとのことである。
[141] *Pazhūhesh-nāme*, p.211.

Emāmzāde ‘Alī Akbar b. Emām Mūsā b. Ja‘far

村はずれのバーグの中。廟の内外を水路が流れている。

ガージャール朝時代の建築である廟を[142]大規模に増改築し、タイルを貼るなどの装飾を行い、ホセイニーエが付け加えられた。1998 年に改修が完了した[143]。

周囲は墓地であったが、現在は墓地の中でも古い部分には樹木を植えるなどしてバーグのような緑の空間としている。

(76) Shāh ‘Abd al-‘Azīm (写真 209)

Shahre Rey

Shāh ‘Abd al-‘Azīm b. ‘Abdollāh b. ‘Alī b. al-Ḥosein b. Zeid b. al-Ḥasan b. ‘Alī b. Abī Ṭāleb

テヘランで最も有名であり、ズィヤーラトのために訪れる人が多い聖所の一つ。

廟は人々からの寄付金などで増改築を繰り返し、廟内の装飾を華麗にし続けている[144]。他に抜きんでた存在であると認められていることから、ワクフ慈善庁の管理からははずれて管理者財団を形成し、廟や寄付金の管理を行うことが許されている。

(77) Emāmzāde Ḥamze (写真 210)

Shahre Rey – Dākhere Ṣaḥne Shāh ‘Abd al-‘Aẓīm

Emāmzāde Ḥamze az navādegāne Emām Mūsā b. Ja‘far

Shāh ‘Abd al-‘Azīm の敷地内、バーザール側正面入り口から見て左手、ハラムの東側にある廟。

オリジナルの建築はサファヴィー朝シャー・タフマースプの時代に遡る。その後、ナーセロッディーン・シャーの時代に改修などが行われている[145]。

(78) Emāmzāde Ṭāher

Shahre Rey – Dākhere Ṣaḥne Shāh ‘Abd al-‘Aẓīm

Emāmzāde Ṭāher az navādegāne Emām Zein al-‘Ābedīn

Shāh ‘Abd al-‘Azīm の敷地内、Shāh ‘Abd al-‘Azīm 廟の入り口のある側とは反対側。

---

[142] Moṣṭafavī,pp.165-167, p.213.
[143] Sarvqadī, p.110.
[144] 廟についての詳しい説明などは、Moṣṭafavī, pp. 147-161, 170-179.を参照のこと。*Banā-hāye Āramgāhī*, pp.367-369.
[145] Moṣṭafavī, p.161. *Banā-hāye Āramgāhī*, pp.115-116.

オリジナルはガージャール朝時代以後の建築とされるが[146]、現在も増改築が繰り返し行われている。

(79) Emāmzāde Gheibī (写真 211,212,213,214)

Shahre Rey – Rūstāye Tūrqūz ābād

(北緯 35 度 30 分 22 秒、東経 51 度 30 分 34 秒、標高 1029 メートル)

以前の建物を壊して廟を新築した[147]。

現在は廟の外側に小さな広場があり、木曜バーザールがたつ。以前は村の外れだったとのこと。

墓地の中。木曜の午後以外は扉が閉められていることなどから、廟の脇に立つ木にダヒールが結ばれ、その根元にろうそくを灯した跡が沢山見られる。

ハサナーバード(Ḥasan ābād)の聖所

(80) Emāmzāde Qāsem (写真 215,216,217)

Ḥasan ābād – Salmān ābād

(北緯 35 度 23 分 9 秒、東経 51 度 11 分 20 秒、標高 1005 メートル)

Emāmzāde Qāsem b. Emām Mūsā b. Ja'far

村はずれの畑の中。隣にはガルエ。

廟の周囲には村の墓地が広がっている。

上部が開いた形の木製のザリー。その中にある緑の布をかけた墓の上にエマームの肖像画などが並べられている。

建築年代はサファヴィー朝と考えられているが[148]、ドーム部分などは近年改修されている。

(81) Shāh Ḥosein (写真 218,219)

Ḥasan ābād – Qal'e Nou - Ḥakīm ābād

村からは随分と離れた荒野の中。

随分と古い土作りの廟。入り口を入ってすぐ、部屋一杯の緑の布をかけられたザリー。その奥に通路のような小さな空間があり、その奥にもう一つの墓石が置かれている。埋葬されている人物を示す名前などは廟内のどこにも見あたらない。

廟に隣接してカールヴァーンサラーに似た建物がある。周囲には井戸ある

---

[146] *Banā-hāye Āramgāhī*, p.178.

[147] 取り壊される前の廟はガージャール朝時代末期の建築であったと見なされている。(*Pazhūhesh-nāme*, p.211)

[148] *Pazhūhesh-nāme*, p.207.

いは盗掘の穴もいくつか見られる。

ガージャール朝時代の建築とされる[149]。

(82) Emāmzāde ‘Abdollāh (写真 220,221,222)

Ḥasan ābād – Qal‘e Nou

Qal‘e Nou のはずれ。塀で囲まれており、鍵を借りないと敷地に入ることができない。鍵を管理しているのは近所のアフガン人家族。

廟は土のドームを持つ小さなもの。廟の外側は盗掘により荒らされている。

廟の中も床が剥き出しで、墓石状に固められた煉瓦の下にも盗掘の穴が空き、ゴミが投げ捨てられている。しかし訪れる人はいるらしく、新しいろうそくの跡が廟内に見られる。

現在は枯れて折れてしまっているが、以前は一本の木が壁の一角から生えていた。

廟の建築年代は 6/12 世紀と推定されている[150]。

(83) Shāh (Seyyed) Ṭāher (写真 223,224)

Ḥasan ābād – Qal‘e Nou

Qal‘e Nou と Shāh Ḥosein の中間くらい。周囲に工場と荒野が広がる中。以前は工場の社有地に囲まれたりしていたために訪れにくかったとのこと。近年、街道から廟へ続く道路が整備された。

日干し煉瓦のドームの一部が崩落しており、廟全体に痛みが激しい[151]。しかし人は訪れており、墓の周囲はきれいに飾り付けられ、清掃がなされている。

廟内の真ん中ではなく、壁際に寄せて新しい墓石が置かれている。

廟の建築年代は 8-9/14-15 世紀と考えられている[152]。

(84) Emāmzāde Seyyed Esma‘īl (写真 225)

Ḥasan ābād – Rūstāye Zīvān

村はずれの墓地の中。木曜の午後のみ廟を開けるとのことで、中は確認できず。

廟は近年改築されたもの[153]。

(85) Maqbare Sheikh Koleinī (写真 226,227)

---

149 *Pazhūhesh-nāme*, p.208.
150 *Pazhūhesh-nāme*, p.208.
151 Sarvqadī, p.107.
152 *Pazhūhesh-nāme*, p.208.
153 Sarvqadī, p. 98.